映画『式日』原作
藤谷文子：著

逃避夢

TOUHIMU written by ayako fujitani

定価 1,050円（本体価格 1,000円）

逃避夢　藤谷文子

1

「ねえ姉さんが死んでどれくらい経つんだっけ」

　慣れないタバコを片手に、まだタンクトップに青空色の下着姿の平岡純十八歳は、日が傾きかけているのが見える三宅通三十三歳の古ぼけた六畳もない部屋に、体育座りというやつをして、ぼんやりと言った。通はカビ臭い布団の上にうつぶせになって、めんどうくさそうに大きく息を吸い、

「二年……経つかなあ」

と言い、首の向きをかえて、ウトウトし始めていた。

　姉さんは、青空色のフィアット500に乗っていた。二年前、十八歳になってすぐ免許をとった姉が、フィアット500を買うと言い出した。私は、ルパンみたいに、黄色がいいって言ったのに、青空色じゃないとダメなのと、私に笑って見せていた。

　母さんは、よく解っていなかったようで、PTA会長の三村さん家の、御主人が車に詳しいと聞いて、ワザワザ訪ねて行き、五時間くらいして帰って来た。いつもそうだ。三村さん家に行くと、そこの奥さんと話し込んで、夕飯時をとうに越えて帰ってくる。

「あ～三村さん家に居ると太っちゃうわあ」

コーヒーをすすりながら、毎回同じことを言う。

「あっ、それから睦」

　姉さんは一月生まれだから睦だけど、私の場合、男の子が生まれると思い込んでいたらしい。母さんが呼んでも返事が無かった。姉さんはよくヘッドホンで、へんなアシュリースターとかいう女性のジャズを聞いている。

「ねえ純、ちょっとお姉ちゃん呼んできて」

　母は立ち上がり、猫の絵がいっぱい描いてあるエプロンに手を伸ばした。

「あ、私もう食べたよ」

「なあんでそんなことするの」

と、母はまるで今、夕方の四時みたいに言った。

「だって、母さんが遅いんじゃない。今もう八時半過ぎてるよ」

　私は言いながら二階に上がりかけていた。

「じゃあ睦は」

　何に腹を立てているのか、怒ったように話すのが癖なのか、いつもそう、私はそれが好きじゃない。

　私は母さんより父さんの方が好きだと、十三歳くらいまでは思っていた。父さんは、私が十歳の頃、家からそんなに離れていない道の真ん中で水たまりに顔を突っ伏して死んでいたらしい。酔っ払っていたそうだ。

　その三日後の晩、私がお風呂に入っていたところに、母さんが、半狂乱になって風呂場に入ってきて叫んだ。

「出なさい早く！　死んじゃうでしょ、溺れるじゃ無いの！　何してるの、早く！　はやくううううううう」

　私は、湯船から出なかった。ただ、母さんの見開かれた眼を見ていた。母さんは、突然二階に駆け上がった。私が、慌てて服を着て後を追おうとしたら、上から母さんに腕を引っぱられた姉さんが、階段を降りて来ていた。

「お母さん！　お母さん！」

　私を無視しているというよりは、聞こえていないようだった。

　母さんは、姉さんを、外へ連れ出し、無理矢理車に押し込んで、血走った目で姉さんに、

「お前が悪い！」

と、叫んだ。とっさに私は、母さんの腕を掴んだ。

「止めて、止めてようぅっ」

言った瞬間、母さんはバッと首だけこちらに向けて、

「お前もか！」

と言い、私を掴んで、車に押し込んだ。

「お前らなんか捨ててやる」

かあさんは運転席に乗り込み、車を走らせた。行くあてなんて無かったのだろう。一晩中走り続けたあげく、すっかり、母さんの人格はもとに戻り、家に帰って来た。

　母さんと、父さんの間に何があったのか、知らない。母さんから毎日のように聞かされてきたが、どれが本当の話か分からないし、今となっては、大の大人二人のドロドロ話など、どうでもよかったりする。

　コンコン。姉さんの部屋は二階の左奥に在る。ちなみに私の部屋は、父さんが死んでから使わなくなったガレージにほんの少し手を加えたものだった。だから夏は死ぬほど暑くて、冬は痛いくらい寒い。

「お姉ちゃん」

　答えが返ってこないので、もう少し大きな声を出そうと、息を吸ったところで、ドアが開いた。

「また、あの曲聞いてるんだ」

「うん」

と、姉さんは、自分の足先に目を落とした。「何？」と、顔を上げた。

「あ、母さんが呼んでる」

　ふうと、軽く息をついて、一度部屋に戻り、音楽を止めて出て来た。

「ありがと」

と、一言。なんで姉さんの部屋はいつもいい匂いがするんだろう。

「フィアットはダメよ、小っちゃいから危ないし、すぐ壊れるし、なんか新しい車にしなさい」

　子供達が、自分で何かを選択したり、ましてや自立しようという素振りを、少しでも見せようものなら、彼女はまるで定められたことのように、躍起になってそれを阻止しようとする。もしそれが、自分の調節可能範囲内なら、どうせ失敗するだろう、でもまあ勝手にやらせてみようと、笑ってみたりする。そんな時の彼女の笑顔を見てしまった晩は、必ず悪夢を見る。

「お願い、母さん、大丈夫だから。私が安全運転しかしないって知ってるでしょう」

　正直驚いた。姉さんは昔から、私とは違い、母さんの言うことはよく聞くほうだった。結局姉さんは、一晩中ねばって、思い通りの、青空色のフィアットを手に入れた。と、言っても、もともと青空色だったワケじゃあなく、白色だったものを、姉さんが特別にきれいな青空色を注文して、ペイントしたものだった。

「何？　突然、ってより、なんで覚えてないの？」

眠そうな声で通は、言った。部屋には夕日が差しかかってきていた。

「うん」

窓の外を見てみると、風のまったく入ってこないこの部屋のムシムシした感じと、夕日の色が、妙に純の息を詰めた。

「姉さんの青空色のフィアットと夕日はとても似合っていた」

返事はなかった。

純が自分の足の爪で遊んでいると、

「俺、ちょっとコンビニ行ってくる」

通はムクリと起き上がってジーンズをはき、さっさと出て行った。一人純は、足の爪をいじり続ける。純の心の中に、ズンと大きな鐘が置かれた。

ああ、まただ。一人、他人の部屋に悪態づかれて、置いてきぼりされて、淋しくてしょうがなくなってきた。何でまた、お姉ちゃんの話なんかしちゃったんだろう。通はきっと、夜まで帰って来ない。雷かなんか突然ここに落っこちてくれれば、そしたらきっと、帰って来るかもしれない。

夕日がデユルリと落ちて行くよりずっと急速に、闇は、純の心をすっぽりすっかり覆った。通は帰って来ない。何で私はこうなんだ。彼女の耳の中には、大勢の人が住んでいて、時に、その人達は、一斉に話し始める。その声は、みんなおばさんで、彼女達は、純の耳の中で井戸端会議らしきものを延々するのだ。今は、この上なくうるさく、何を言っているのかは、全く聞きとれない。

「止まって　止めて　止めて」

頭を振ってみたり、聞こえないよう声を兎に角出そうと、

「あああ〜〜〜あああ〜〜」

低い声を、震わし出してみる。おばさん達は、一向に止めようとはしない。純は暴れ始めた。右へ左へと腕を振り回した。ガシャン　振り上げた右手が、この薄い窓ガラスを突き抜けていた。

「あ、止まった……」

腕からは、血が結構な勢いで出ている。

「部屋汚しちゃうなあ」

腕はまだ窓から突き出たまんまだ。足を目一杯伸ばして、灰皿を足の先で取り、灰皿で血を受けながら、ドアの側に落ちてあるタオルを拾い、とりあえずそれを腕に巻いた。もそもそとジーンズをはいて、アパートメントを出た。血はすでにタオルにうき出てきていた。

2

一人、外に出てみて、今まで意地でも帰りたくなかったあの家に帰ろうとしていることに、純当人が、少し不思議に思った。そうだこの流血を期に、きっと母親も怒らないだろう。小学校低学年でも、今どきの子なら持たないであろう安易な思考。いや、それどころか彼女に心配というものをしてもらえるのではないか、という期待に胸を膨らませた。ひさしぶりの家の戸を開けると、中は真っ暗で、玄関はまるでこの家が大家族かのように、大量の靴が散乱していた。ドクッ　ドクッ　ドクッ　腕の出血が音となり耳に届く……。

純の母親がほんのりと頬を赤く染め、疲れはてた様子で帰宅した。すぐに純が帰ってきたことに気づき、純の部屋に行ってみるが、そこに純の姿は見当たらない。台所のほうに戻り、イヤリングをバチンバチンと取り、テーブルの上に無造作に置いた。もしや、と思い睦の部屋に行ってみる。容赦無しに部屋の戸を勢いよく開くと純は部屋の真ん中に、ペタリと座っていた。戸が開くと同時に、何とも嬉しそうな顔で、純は振り向いた。その表情は幼かった。

「おかえりなさい」

腕のタオルの血は、変色して、苦い味のするチョコレートのような色をしていた。

「どこに行っていたかなんて聞きたくもない。汚らしい、この親不孝もんが!」

戸を開けっぱなしで、母親は、サッサと下に降りて行った。残された純は、よいしょ、といった感じで立ち上がり、下に降りた。母親は、すでに着替えており、ブランデーを飲みながら化粧を落としていた。

「母さん」

答えない。純は少し母親に歩みよりつつ「ねえ」と腕を突き出してみせた。母親はめんどうくさそうに、やっと顔を上げ、純の腕を見た。

「ちょっと、あんた何してんの!」

慌てた彼女は、純の腕を力まかせに掴んだ。

「痛っ!」

その声は小さかった。母親は純を流しに引っ張って行き、タオルを乱暴に取った。赤黒い血はまだ、純の腕からでていた。母親は傷口を洗おうとしている。その間、純はずっと、彼女の顔を見つめていた。

純は自分の部屋にあるだけのローソクに火を灯し、冷たい床に寝転んで、赤く塗られた天井を見ていた。それは彼女が、自分で一生懸命塗ったもので、その日はシンナーの匂いで、一日寝込んだりした。「青、青空色、赤、アシュリースター、砂の扉、長い牙、足、一酸化炭素、黒い石、ツルツルの黒い石」

純はめずらしく機敏に、体を起こし、部屋を出た。リビングルームには思った通り母親がまだ起きていた。ウイスキーを飲んでいる。母親の姿を見た瞬間、純は凍りついたように体が硬直してしまった。

「純ちゃああん」

ご機嫌な甘い声を出している。後ろから見るテーブルに、覆いかぶさっている彼女の背中は、でっかいコブかなんかが生えている異様な生き物に見えた。彼女は、左腕をぶらりと振り上げ、バンバンとテーブルを叩き、こちらに来い、という素振りをした。純はいったん冷蔵庫にたちより、牛乳を取り出し、母親の斜め前に座り、彼女の目をみたまま牛乳パックからそのまま口飲みした。

テーブルの上には最低二日はたってそうな食べ物があったり、最後に使ったまま、小さく折りたたまれた上、ぎゅうっと握った形の台拭きが、完全に乾燥し、カチカチの状態であった。母親は、嬉しくてしかたない様子で、まだらに赤い頬と、黄ばんだ白目で、最上の笑顔を浮かべた。

「あんたとねぇえ、睦は昔から仲が良くてねぇえ」

そうでもなかった。とりわけ毎日喧嘩をしていたワケでもないが、仲は良くなかった。純は母親の顔から、目線を外そうとはし

なかった。
「あんたの小っちゃい頃は可愛くてねぇえ、いつも母さんの真似してねぇえ、睦の世話しようとしてねぇえ、字も読めないのに、お姉ちゃんに本読んだげようとしたりして、睦が、嫌がっても、嫌がっても、あんた止めないから、クククククククク。睦は、本全部捨てちゃったのよねぇえククウククックククックゥクックック」
純はそんな母親を見て、微笑みさえ浮かべていた。立場が逆転していた。もしかしたら、ずうっと以前から、母親は、純の子供のように、純に甘えたり、愛情を欲したり、ダダをこねたりしていたのかもしれない。
母親がもう止まらないのかと思う程、笑いだしたかと思うと、その表情は、突然憎悪で、いっぱいになり、空(くう)を、見つめている。ああ、この目は、彼女が昔、時折りみせていた、もう一つの顔であった。
「あのねえ純、睦は、母さんの言うこと聞かなかったから、ダメだったのよ。あんたも、後で、後悔したって遅いのよ！　ちゃんと母さんの言うこと聞かないと、あんたも、お姉ちゃんと同じことになるわよ！」
そんな母さんの言葉に、恐怖を覚えた。母親の言うように、お姉ちゃんと同じになるというものになれたら、どんなにいいだろうと思った。
「わかってるの？　あんた学校だって行ってない……」
「なんでだろう」
純はゆっくりと口を開いた。
「何でいつも、そんなん、なんだろう、お姉ちゃんは母さんの娘なのにさあ」
語尾の声が裏返ってしまった。
「あんた私がたまに学校の話したらうるさがって、話をかえるな！　おまえは」
「ちがう……」
「まあ、あんたも睦も、あの男の血をひいてるしね」
心がプルプルと小っちゃくなっていく。
「お母さん、私は大丈夫だよ。あ、私ね、料理一つ覚えたんだよ、だから今度……」
「あんたが怖いのよ」
その表情は、本当に怯えたように、今にも食いかかって来そうに、純を睨みつけていた。純は家を出た。なまぬるい、肌にねっとりすいつくような風。
「上弦の月、錆びたパイプ、クラゲの笑顔、絵かきの譫言」
悔しさが、胸の中でモワモワと蠢いている。
こんなことで、悲しくなってたまるか、あんな母親に今更何を求めていたのか。純の心の葛藤は、彼女の顔を、まるで、青いカプセルをコーヒーに溶かしたように歪める。自分がまるで、抜け出(い)でることの出来ない、小さな町にある、人目につかない古い映画館の中にいて、暗くて、いやあな映画をただただ観ているような気がする。映写機は狂ったように、止まることなく、鈍い音をギーギーと放ちながら、スクリーンには、観るに耐えない可哀想な子猫や、虐待されているサーカス団の象や、やけに希望を持たせる優しいパパと、子供達の団欒映像が、映し出されている。その映画館の外に出ることさえすれば、全てがウソであったように、太陽の光照る、優しい風が、純を包み込むような世界があるはずなのに……。その映画館の扉は、固く、重く、決して、開かれない……。

3

コーヒーをすすり、少し渋い顔をしてみる、ボサボサ頭の男、小倉舞三十二歳は、週に一度の休みの今日、十二畳程ある自室で、何をするでもなく、一人で過ごしていた。
「タバコは……と」
タバコを切らしていることに気づき、ボロボロの、白いスニーカーを履いて、外に出た。黒のTシャツに、灰色のダボッとしたトレーニングパンツ姿の舞は、猫背で、そのボロボロなスタイルが、可愛らしい。
純が、フラフラと、力無く歩いている。どのくらい歩いたかは分からないが、彼女の、今日の出血した量からすると、これ以上歩くことが、出来なくなっていた。
目の前に、煌々とコンビニエンスストアが建っている。純は、店の前にある『カン・ビン・もえるゴミ』と書かれたゴミ箱の横に、座り込んだ。闇の中から店の方に向かってくる男がいる。何だかどうでもよさげな見た目の男、小倉舞だ。誰にでも純の姿は目についた。舞と純の目があった。舞は反射的に目を離したが、純は彼を見つめている。その純の横を舞は素通りして店の中に入って行った。
「フィリップモリスください」
「うち、タバコあつかってないんですよぉ、すみません」
学生らしきアルバイトはペコリと頭を下げた。
「あ、いえ」
舞も頭を下げた。その様子を純は首をめいいっぱい後ろに回して見ていた。舞が出て来た。
「タバコ、置いてなかったの？」
「あ、君持ってんの？」
首を横に振る純。
「そっか」
「ごめんね」
純は申し訳なさそうにニコリとした。舞はその笑顔を見て、幼少の頃によく作った化学薬品の匂いがプンプンするシャボン玉を思い出した。いくら飛ばせど、振り返るともうない……舞は道端で見つけた猫に近づくように純の隣にしゃがみこんだ。
「こんばんは」
と純は嬉しそうに言った。彼女はたった今雨が降っていれば、一緒に雨宿りでもいかがですかって誘えるのに、なんてことを考えていたところだった。
「こんばんは……君、大丈夫？　なんか辛そうだけど」
その時、何故だか舞は純のふくれた唇の隙間にチラリとのぞいた乾いた前歯を見た。
「うん、あのねぇ血が足りてないみたい」
「病院とか、家帰るとか」
「今日はお家が火事になっちゃって、帰るところもないしここにいるんだけど、病院は行かないんだ」
舞は困った顔をして立ち上がった。
「歩ける？」
舞はその聞き方があまりにもぎこちなかったせいか、その少女

を誘拐の一つでもする気でいるような気がした。純はニコリと微笑みながら首を横に振った。街灯の光が闇の中にポツリとある。タバコを買えなかった男は少女をおぶって歩いて行く。

「私、純っていうの」

舞は鼻で笑い、

「男の子みたいでかわいいねえ」

純も鼻で笑い、

「あなたは?」

「舞」

ムフフフフ、純は舞の肩に顔をうずめて笑い、

「女の子みたい」

舞の部屋のドアが外側に開いた。月の光が部屋の一部をぼんやりと映し出した。器用に足でドアを開け中に入り、ドアの横にある背の高い電気スタンドの明かりをつけた。黒くて細いポールの上に大きな濾過器をくっつけたようなもので、ポールの所についてあるつまみで明るさを調節できるものだ。舞は部屋の明るさを極力暗くした。ぐったりしている純を、まだ首のすわっていない赤ん坊を扱うように布団の上に寝かせた。ポフって音がした。舞はいつも布団の右側で寝ていることが分かった。白いブランケットのちょうど右側だけが人一人分だけめくれていて、残りはホテルのベッドのようにマットレスに繰り込まれていた。

「何か飲みたい?」

純はぐったりしてるわりにはニヤニヤした表情で、

「ううん、いい」

「本当に? 何か買ってくるよ」

純は少し慌てた様子になり、

「大丈夫だよ、本当に」

舞の行動を阻止した。純は寝ころんだ体勢のまま見える範囲をくまなく見回した。テレビやCDプレイヤーがフローリングの床の上にそのまま置かれてある。冷蔵庫がないことに気づいた。窓のブラインドは閉められており、その横にある白い本棚の下から二番目の棚にコーヒードリッパーがある。その上の棚にはUFOキャッチャーのミニチュアなんかも置いてある。

「じゃ、テレビ見よっか」

リモートコントローラーを探す。もう午前四時をとうに過ぎてるはずなので純は、そろそろ寝なさいよって言っているような曲と一緒に淡々とやっている天気予報ぐらいしかやっていないんだろうなあ、なんて思った。テレビを点けてみると、何だかどこぞかでいろいろと見たことのある小柄なメキシコ人が、白人の大男五人に袋だたきにあっている刑務所映画をやっていた。舞は純のほうに顔を向け、この人実生活でも刑務所に入ってたんだってね、と笑って見せた。純は疲れきって眠気もあるはずなのに、暗い部屋に不規則に光るテレビのストロボが目の中にチクチクと刺さってきていて、映画の内容は全く頭に入ってこない。無性に眠い。眠れない。俳優達の発するセリフの、一言一言が、宇宙人かなんかが超音波でも使って、何らかの信号を純の脳髄に送っているようにしか聞こえなかった。ふと舞を見てみると、彼もまた、テレビを観ているように見えていたが、天井を見つめていた。何か考えているのだろうか……。純は、ぐぐっと目一杯体をまるめ、ブランケットに顔を埋め、目を閉じた。

月の明かりだけで十分明るい通の部屋。割れた窓ガラスの前にしかめっ面で、立っている。ガラガラガラガラガラガラ。まるで気を落ち着かせるための様に、割れた窓を開けたり閉めたりし、グルリと部屋を見渡して、舌を打った。

4

舞の布団の上に、上半身だけを起こして座っている純。一つしかない黒いエルヴィス・プレスリーのまだ痩せている頃の写真がプリントされているマグカップでミルクを飲んでいる。その横でボサボサ頭の舞は、タバコを吸いながら天気予報を見ている。というよりは、目をやっている。純が膝を起てると、白いブランケットが四方から引き寄せられた。

「ねえ、お仕事何してる人?」

舞に聞いているのだが、彼女の目線はテレビで、マグカップの中に口を入れたままモゴモゴと言ったので、別に本当に聞く気があるようには聞こえなかった。だが舞はほんの少しの間を置くこともなく、何か企んでいるボサボサ頭の少年のような顔で笑い、言った。

「見世物小屋って知ってる? 知らないかあ、君は」

「知ってる……お母さんが、何か言ってた」

いつだったか、まだ睦と純が幼かった頃、近所の神社の秋祭りに行ったとき、母親が焼きとうもろこしを買って、一本を二人で分けるのよ、と言いつつ、真っ黒な人込みの中を歩いているとき、彼女が睦の歳の頃一度だけ行った見世物小屋の話をしていた。彼女の伯父は、京都大学の医学部を出て、大学院も出て、博士号も持っていて、という人らしいが、純や睦が会ったことはなかった。その彼が大学に入ってやっと落ち着いたっていう頃実家に戻って来て、幼い母親を近所の夏祭りに連れて行った。見世物小屋は屋台がズラリと並んでいる道を一つ裏通りに入ったところにあって、彼女が覚えているのは、中に入るとやたらと暗くて、たくさん人がいて、何も見えなかったことらしい。彼女は見世物小屋のことを、悪魔の商売、と呼んでいた。

「僕の時代にも、もうほとんど無かったんだけどね、実は今もあるんだよ見世物は。僕は見世物になる人を捜す人。だから君を拾ったの、猫娘になれるからね」

舞はそう言って、上目づかいに純の反応を待っている。純はその様子を見て、やっと感づいたのか、

「うそだあ」

「うそだけどね。でも僕の母さんは本当に蛇女だったんだ。小っちゃい頃は小屋の人達みんなで住んでたんだけど、何かね、炊飯器に一カ月以上放置されているゴハンのモア～ンって感じの匂いが時々してたんだよなあ。父さんはそうして見世物になる人を捜して来たりもしていたんだけど、客引きもやってたんだ。普通はねアラダンカって言う客をまくしたてるように景気良くしゃべるもんなんだけど、父さんの客引きはいつも、ナキゴマセっていわれるやつだったんだ。ナキゴマセって客の同情を引くように喋るんだよ……僕達は、父さんにとっていつでも可哀想だったんだ。僕達の部屋はいつも蛇でいっぱいだったんだ。僕が八つのとき、子猫を拾って来たんだ。押し入れの中に隠してたはずなんだけど、次の日の朝には猫も蛇も死んでたよ。もの凄く怒られたけど、そういえば母さん見たんだって、夜中に僕の枕元で踊り狂う蛇の影

「……」

純は朝っぱらからの舞のトッピな話をサザエさん一家の話でも聞くように普通に聞いていた。

「父さんはその頃、人間ポンプの上を行く人がいるんだって、その人を見つけることばかり考えていたんだ。僕が生まれる十年くらい前に新聞の小っちゃい記事で読んだんだって。その人の名前だって今でも覚えてる、毎日のように聞かされたからね。村田小作さんっていってねハハハハハ。その村田さんはカミソリでもクギでも、その辺のサラリーマンの眼鏡でも食べちゃうんだ。あ、こうもり傘のホネってのもあったなあ」

「ガッチャンみたい」

「ん?」

「その人、ガッチャンみたい、あられちゃんの」

「……本当だ」

舞は純を見てまたよく笑う。純は舞を見て、

「猫娘かあ」

ニコリと笑い足の爪をいじり始めた。

「僕はね、小っちゃなバーでフロアマネジャーをやってるの、っていっても友達がやってる店だから好きなときに顔出すだけでいいんだけどね、本当は。まあ、することもないから毎日行ってるけどね。やけに人気あるんだよねそこ。なかなか入れないんだよ、誰かの顔見知りだったり、僕が気に入ってる人とか? ハハッ、小っちゃくて、中も暗くて、することといったら酒飲んでタバコ吸っておしゃべりくらいなのに、なかなか入れないとなると、入りたがるんだよねえ、人って」

そう言って何だか情けなさそうな顔をして新しいタバコに火を点けた。このタバコと牛乳は、朝、純が買ってきたものだ。舞が目を覚ますと、純が居なかったので、猫娘を拾ったのは夢だったのかとボーっとしていたところに純が、タバコと牛乳と、焼いたレバーをたくさん買って帰って来た。天気予報が終わり、やたらと声の高い新人と思われる女子アナウンサーが「みなさあん　あけびってご存じですかあ」と棒立ちになっている農家のおじさんの横で叫んでいる。そうして、舞はシャワーを浴び、仕事に出掛けた。

「舞ちゃん、お姉ちゃんみたい、いい匂い」

5

ダラリと暖かい日が、京王線の揺れる電車の中に入って来ている。心理テストか何かでホノボノした光景を思い浮かべて下さいと言われて、イメージするような車内に純はいた。車両の進行方向一番手前の席の端っこに、行儀よく座り、電車の揺れに身をまかせ、右へ左へと揺られている。動く光をゆうっくりと目で追っている。

普段あまり人の降りないその駅から十分くらい歩いて、なだらかな坂を登りきったところに通のアパートメントはあった。昨夜の暗く淋しくみえていたその情景など存在しなかった様に、早めに学校を終え、下校している低学年と思われる小学生三人が楽しそうに前から歩いて来る。その様子を微笑ましいなあ、というふうに見ていたが、はしゃぐ彼女達の膝小僧に目がいく。グワーンと頭が痛くなり、目の中に、見えるもの全てが飛び込んでくる。目を強く瞑ってみる。ふと目を開けると、純は小学生だったころ

通っていたはずの校庭に立っていた。朝礼台には山田校長先生が、月曜の朝に必ずする、為になる話を何か一言話す度に、咳ばらいであったり、え~~~とか、あ~~~とかという音を発しながら話をしている。山田校長先生は頭髪のほとんどが白髪で、ポマードをテカテカに光らしている。色黒で面長ということから、オラウータンに似ている。

「え~~それではぁ　みなさんにぃクイズです。ゲホッ　天国の人達とぉ　地獄の人達にぃ　あ~~三メートルのスプーンでですねぇ　え~~」

目の前の朝礼台の上の山田校長先生、猫背というよりは、やけに背中がまるく盛り上がっている。ヘリウムを吸ったみたいな声が校庭に木霊している。見ると、いつのまにやら朝礼台の前に十三人の小学生達が気を付けして並んでこちらを見ている。日差しがあまりにも強く、純は日射病になってしまうように思った。頭痛がおそう。目の前の子達は、男子は短パン、七人。女子は膝上スカート、六人。純は校長先生の話が終わるのをただひたすら待った。目の前の子達を見ていると、横一列に並ぶ二十六個のぎゅっとひきしめられた膝小僧が表す凹凸が、目鼻のくっきりした人の顔のようで、人体に寄生する人格を持つ一個体の怪物のようで、純は吐き気を催した。校長先生の話、早く終われ　終われ　終われ　終われ。

純の目の前にはもとのホノボノ風景があった。下校中の小学生との距離間から、時間が三十秒すら経っていないことがわかった。純はひきつった笑みを浮かべた。

通のアパートに入って行くと、壁はコンクリートで、地下室に入る時のようにひんやりとしている。暗くて、同じくコンクリートの階段を登って行くと、右側一番手前の三〇二号室が、通の部屋だ。アパート全体がカビ臭い廊下の突き当たったところに窓があり、そこから一条に長く伸びた光が眩しくさえあった。通の部屋の前には、猫がきちんとお座りをしている。

「やっぱり、入れてもらえなかったねえ」

純は猫をふわり抱き上げる。その猫は銀色の毛をフサフサさせて真っ青の目で、抱き上げると、茹で上げたばかりの湯葉のように柔らかい。純がその猫を見つけたのは、ゴミ捨て場であった。側にあった鳩の死骸の横でまるでその鳩が母親であったかのように、子猫は口のまわりを真っ赤にして鳴いていた。そのときの鳩の血がプチプチとまるでいちごジャムそっくりだったので、名前はジャムちゃん。いまでは子猫というより中猫だ。

「ジャムちゃん、君の目は本っ当に真っ青だあ」

ジャムを抱き締め純はアパートを出た。

純はもうだいたい通のスケジュールというものを把握していた。それはほとんど決まってといっていいほど、こうであった。昼の一時くらいまでダラダラと寝て、一時四十五分にはふらりと彼のいうところの打ち合わせなるものに出て行く。通はもともと花屋でアルバイトをしていたが、二カ月程前に辞めたらしい。いやだいたい花屋で働き始めたのだって別に彼がＬＯＶＥ＆ＰＥＡＣＥを主張するヒッピー青年なワケでも、あの花粉のムズムズ感がいいんだよ、とか花に関する動機などは全く無く、それは純の姉の睦が溶けるような笑顔をふりまき毎日のように働いていたからだった。

最近ではどこで見つけて来るのか、スポンサーになれそうな人

がみつかったと言っては毎回違った商売に手を出そうとしている。一儲けってやつだ。この間なんかは世界で最初にインターネットを思いつき、世界中に広めた人がいて、その人に大変気に入られてお金を出してくれるから映画の一本でも撮るなどと言っていた。純はコンピューターのことも、インターネットのことも詳しくはないが、ビルゲイツとかいうＭａｃの人がインターネットのなんたらかんたらである。ということくらいは知っていた。

「ねえ、その人何人？」

通の神経を逆撫でなどしないようゆっくり聞いてみると、真顔で、

「台湾人」

と答えた。放っておくことにした。

純はジャムちゃんをまるで割れ物注意！と赤い字で激しく書かれたシールが貼ってある小箱でも抱えるように抱いていた。下る坂道はやっぱりホノボノで、うすっぺらい風がジャムちゃんの長い長い髭と純の頬の白い産毛をくすぐっていた。

ジャムちゃんが一番好きなキャットフードは、中でも一番安い『猫大喜び』という怪しいものだった。立ち寄ったスーパーでの『猫大喜び』には今日もやっぱり特価と爆弾が爆発したような絵が描かれた札がかけられていて一・五キログラムのものが、百五十円だった。

6

舞のアパートメントに再び帰って来た純は、その白いドアの前で足を止めた。ドアを見つめ今さらながらにもうすでに人の家を眺めては少しばかり安心したりした。

ホケーを続けていたところに舞の黒のオープンＳＡＡＢがアパートメントに向かって来るのが見えた。車から降りた舞は、すぐに屋上の上の純と、その手の中の中猫に気づいた。純は怒られると瞬時に思い、とっさの言い訳を考えたが、ダメだった。舞はその姿を見て、鼻から息を出し笑い、

「何してんの？」

と聞いた。なんだか犬がくしゃみしたときのようだった。

「ふぇ？」

純は返事にならない返事をした。

「降りて来ないの？」

「降りる」

純の唇の隙間から見えた前歯は唾液に濡れ、舞は彼女のその短いであろう舌の裏に何かが印されているような気がして、降りて来た純の手からそうっと中猫を取り上げた。

「ジャムちゃん」

舞の顔色をうかがいつつ言った。

舞はその日、午前十一時には仕事と言って出掛けたはいいが、本当は、忙しいはずの金曜や土曜でさえ、夕方六時頃に店に入ればちょうど良いくらいなのに、彼は今朝純のいる日の始まりというのに何の違和感さえ感じなかった自分に気づき、戸惑い、アパートメントを出たはいいが、いままで人とは必要以上に関係を持ったことがめったになかったせいなのか、今度は、壮絶な罪悪感に襲われた。純のことが異常なまでに気になって気になって仕方なくなり、こんな時間に帰って来たのだということを、純には言わなかった。

自由に出入りしていることを不自然に感じたのだ。

（しかも猫まで）結局彼女はどうして良いのか分からず、その背の低いアパートメントの屋上にあるタンクに座ってしばし時間を過ごした。それが彼女なりの〝遠慮〟だったのだろう。ホケーッとしながらいろいろな思いや考えが頭に浮かんではすぐに、その何かが浮かんでいたことさえ忘れてしまう程に、その夢想の一つ一つは急速で一切の脈絡もなかった。

彼女の頭の声はこんなだった。

『ふんわり　ふわふわ　闇の中　どうでもいい　そうなのだ　ヘラヘラニヘラ　違うだろう　そうじゃないねえ』

『無表情な蚊が落ちてゆく　でっかい蚊　私よりずっと　ずっとでっかい蚊　ぐったりしていて動かない　自分よりずっとでっかい生物に掴まった　そいつの足で掴まれて、そいつはばたいた上まで行って私のすぐ上をとんでった　だけれどその蚊はそこで足を離され　落ちてった　それでも　ずっと、無表情　そのままヒュルリ　ヒュルリと落ちてった』

そんなとき彼女はあまりにも普通に晴れている空を見ていた。

彼女は雨が好きだった。雨が降るたび彼女の心は癒された。それはきっと世の中の浮かれた人々がやっとこの時ばかりは、みんなして下を向いて歩くときだから。雨の上がった次の日だって、ひび割れたアスファルトの上にできた水たまりを見ると、ぶざまにも死んでった父親が路面の汚れた水たまりに顔を突っ伏している姿が浮かぶのだ。そのときやっと彼女の中にある、はっきりしない様々な影が、形を現し、彼女の目の前にはっきりと投影され、

『仕事は終わり？』

ジャムを撫でる舞の横から尋ねる。

「ん〜〜いや、また戻んなきゃ」

口の中で言うので、よく聞こえなかった。

ピカピカ光る、つるつるの、アメ玉のような紫色のマニキュアを舞の爪に塗っている純。舞は、あいたほうの手で、ジャムちゃんの蚤トリをしている。二人の横には以前からあったエルヴィスのマグカップと、もう一つ、彼が太った後の写真がプリントされているマグカップがあった。

「今度は何色？」

ジャムのフサフサの毛の中を逃げまどう蚤を追いかけながら舞は聞いた。

「白っぽい紫」

細かい作業が必要なプラモデルでも作っているようにせっせと塗る。

舞のところに居着いて、一ヵ月と二週間くらいになるはずだが、純は、このダラダラが好きだった。このダラダラが宝物だと思っていた。彼女にとって舞は、魔方陣なのだ。ピンクのチョークで描かれたこの魔方陣の中にさえいれば、純は、眠れるし、笑えるし、ゴハンも食べられる。もし一歩でも外に出るなんてことがあれば、そこには一切の掴まるところも無いのだ。もっと言っちゃうと、そこには影も無いので光も無く地面すら無いので空も無いのだ。彼は何も聞かない。でも純が話をすると聞いてくれる。これが包容力かぁなあんて思ったりしていた。

純は、すっぽりと飲み込まれたように、暗い森林の中に立つ。ふと、目の前に巨大な男が立っている。

「包容力のある手をしていらっしゃるんですね」

男の両手は木の枝のようになっていて、どんどん細く幾重にも枝分かれしてゆく。男の頭は暗くて黒くて見えないが、紳士の帽子を被っているのは、よく見えた。妙に大きな頭ということもわかった。点くことのないテレビのようにも見えた。

7

今日は駅前の古本屋に行こうと、純はポテポテと自転車のよく通る商店街を抜けて、猫屋敷になっているオモチャ屋の右の細道を入って行った。その奥にある本屋が純は大好きなのだ。小っちゃい小っちゃい店の中は、本でいっぱいで、人一人歩くのが、ギリギリで、お店のおじいちゃんは、本に埋もれてしまって、顔しか見えない。純は、本をみるというよりはそのおじいちゃんがおかしくて仕様がないのだ。純が何を考えるでもなく、ズズーンと重みのある本棚をしかめっ面で睨みつけていると、切れ目の年齢不詳な男が、同じく本棚を睨みつけて立っていた。男は棚の上のほうに手を伸ばし、茶色の布地の本を取り出しパラパラとページをめくった後、そのまま肩から掛けていた白い布地のカバンに本をしのばせ、スッスと男はその場を立ち去ってしまった。純はあからさまに男の方を見ていたが、とっさに自分の方が慌てて本棚の方に首を向けた。男はいなくなり、純はおじいちゃんの顔を捜したが、見当たらなかった。純は思い詰めたような顔を浮かべ、店を出て、男の姿を見つけようとキョロキョロしたところ、商店街とは逆の方へ歩いて行く男の背中が見えた。その男の背中が見えなくなるまで純は、道の真ん中に立ちつくしていた。完全にその背中がなくなり、純はうつむいた。自分の足下を見たまんま、トボトボと男と同じ方向に歩きだした。

男の盗った本は何だったのだろう。おじいちゃんの顔、何故なかったんだろう。

純の右側には線路が真っすぐ伸びていて、まるで夏の線路のように、焦げ茶に錆びたレールが発熱しているように、その周辺がぐにぐにに揺れて見えた。左側にはもう何十年も建っていそうな家がいくつか並んでいた。いつの間にか純は一人、トゲの無いサボテンのように無防備になっていた。だが彼女の左目の端に何かが映り、彼女の心臓は大きく縮みこんだ。ツタに覆われたお屋敷の塀の前に、さっきの切れ目の男がしゃがみこんで茶色の布地の本を読んでいる。本屋では掛けていなかったはずの眼鏡をして、音読しているようだった。本には金字で、『三っつの宝』と書いてある。芥川龍之介とも書いてあった。と、さっきまで気になっていた誰の何という本かという答えが出たところで、自分がまるで腹を出して寝ている子猫のようなことに気づき、本能的にそこにいる男に対し、異常なまでの恐怖心が剥き出しになった。

男がこちらを向く前に行ってしまおう。そう思った瞬間、地をひっくりかえしたような音と、地響きが、純の全身を攻めた。なす術のない無防備な彼女は、声さえも出せないまま、頭を抱えてその場にしゃがみ込んでしまった。この世の終わりか、はたまた自分の気でも違ったか、と思い怖々頭を上げてみると、その地響きの主は、発熱する線路の上を急ぐ特急列車だったのだ。

何でもないと分かっていても、よほど怖い思いをしたのか、私ってバカねと、笑えず、そのまま泣きそうなのをこらえようと唇を噛んだところで、突然男が立ち上がったので、純は這うように悲鳴にならない悲鳴を上げワタワタふぎゃふぎゃと、立ち上がり逃げた。まるでテキサスチェーンソーに追い回される金髪女性のように、怖がって、動揺している。

ない　ない　ない　ない　掴まるところ　何処だ何処だ何処だないないないないないない……　アパートメントに帰るが、そこには、舞は、いない。

呼吸が不規則に荒く、恐怖感は消えない。

どんなに捜しても愛しき人の肩はそこにはなく、彼女を襲うものはこの言い知れぬ恐怖ばかり。もう、そこまで来ている憎悪は『許す』、という単純なる言葉を知らず、刻一刻と迫り来るのです。

逃げることだけが彼女の唯一知り得る術なのか。そうだとしても、逃げる正しい術さえも知らず、戦うことなど出来るわけもなく、そうなれば、このまま、なすがまま、我が身を流れの渦に委ね、この恐怖の深い淵へ落ちてしまえば、この吹き止まぬ強風も止まるのか、この開いたまま閉じない瞳も、そろそろ限界かもしれない。

死ぬかもしれない。フト純は思った。いや、別にいいのだけれど、これは本当に死ぬかもしれない。そう感じた純は、夕方家路を行く人波を逆流し、履き古したヒラヒラのスカートのポケットからジャラジャラと小銭を出し、切符を買い、電車に乗って行く宛ては、通の家であった。純にとってのやっとみつけた、たった一つの宝物はたしかに優しく暖かい、それで何故だか懐かしい。

ダラダラの昼前に学校が終わり、お腹を空かせて帰って来ると、カレーライスの匂いが家中に満ち満ちているような毎日だ。愛しき人を裏切る気などことさらない。舞という存在が無ければ、あのままバカを剥き出しにし、狂気に身をまかせ、自らの命を絶っていたか、道行く幼子に電気きつねを見に行こうと、行き連れにしていたやも知れない。ただ純は、自分を、限りなく平坦な現実の世界に引きずり出してくれる、キッカケなる人が必要なんだと考えた。

8

目を閉じて歩くように、何も見ないよう何も聞かないよう、自分の足先だけみつめて足早に歩いた。

不思議だった。何の躊躇も無かった。勢い良くアパートメントの中へ入って行った。

冷たいコンクリートの階段を登ったせいなのか、純の呼吸は荒いまま。通の部屋の戸を開けようと伸ばした手は、わざとらしく震えている。戸は、ギギッとわざとらしい音をたて開いた。

純の出てった日と何一つ変わらない部屋、割れた窓ガラスまでそのままで、へなへなの布団の上で、あぐらをかいている通がいた。雑誌のモデルさんの顔に落書きをしているところだった。通は顔を上げ、純に気づくと、別に驚いた様子などは見せず、顎を上げ、

「じゅん〜〜〜」

ゆっくりと言いながら腰を上げ、まだ戸口に立っている純の側に来た。純がヘヘッといったような苦笑いの一つでも浮かべよう

と、その膨れた頬の筋肉を緩めた瞬間、両肩を鷲掴みされ、体が通の方に引き寄せられたかと思うと、扉の横の薄っぺらい壁に、ドンという音をたてて押し付けられた。急に肩から引っ張られたので、首が痛かった。と、次の瞬間、純の両肩にあったはずの通の手は、純の首をしっかり掴んでいる。いつの間にか部屋の戸も閉まっていた。純の首は細いので通の利き手の左手一本でも充分にゴギッという音一つで簡単にへし折れそうだった。

通は純の顔を見ていたが、右手を彼女の左肩にのせ、左手は純の首をしっかり掴んだまま、うつむいた。

通の左手に力が入り、純の首を二拍子を刻むリズムのように揺さぶり始めた。その度に、何の抵抗もしない純の頭は壁に　ゴン　ゴン　と、ぶつかった。リズムに乗ってうつむいたまま通は言った。

「何　ゴン　で　ゴン　おまえ　ゴン　は　ゴン　そうなんだ　ゴン　あ?」

ゴン　ゴン　ゴン　通が顔を上げてみると純はされるがまま無表情に通を見ている。その目には冷ややかささえも感じる。

「お前、なめてんのか」

純は静かに首を横に振る。

「何とか言えよ」

純は冷ややかな目をしたまま笑みを浮かべた。もちろんその笑みは通を逆上させた。通がやっと両手を離してくれたので、純が大きく息を一つついたところで、通は勢い良く部屋の中を所狭しと純を振り回し、反対側の壁に叩きつけた。

「ふざけんなよ、な!」

押し殺した声は怒りで震えている。

「今まで人がいろいろとしてやったのにお前は何にも分かんないんだなぁ。バカなんだろうなぁ」

通は純の首をまた左手でおもいきり掴んだ。

「二度と俺の前から消えるなよ」

脅しかかった声色に顔色で必要以上に攻撃的な目をしているはずなのに、何故だかその様子は物欲しげなイゾーテを思わせた。その時純は初めて通から目を外して唇を噛んだ。血が出るくらいにギリリと噛んだ。もうそれ以上顔を見ていられなくなって、目一杯下を向いた。

「何だよ」

そう言われても頑張って下を向いている。

「なあ」

「私は」

顔を少しずつ上げるが何を言っていいのか分からない。純の脳みそに半透明の柔らかくてそれでいて弾力のある湿った膜が張られた。

「出てけよ。もういいよ」

いきなり純を突き放す。

「お前といるとこっちがおかしくなるんだよ。お前のせいでヘンになるんだよ」

突き放された純は、頭をくしゃくしゃとかきながら扉の方へ向かった。通は純を罵倒したりなかった。全然だった。反応の少ない純の心の動きが分からなく、イラだっている。

「お前おかしいよ、頭おかしいんだよ」

純はその言葉に必要以上に反応した。首を激しく横に振った。

「違う」

出したはずの声は声にならず、首を振るばかり。

「気ぃ狂ってるんだよ、お前も。お前の姉ちゃんも。お姉ちゃんみたいになりたいんだろ。もう立派になってるよ。よかったなぁ。後はいろんな男と寝て、妊娠でもすれば、お前の大好きな憧れのお姉ちゃんだよ」

もう首を振ることも、否定することも、呼吸することさえも出来ない。

「じゃまくさいよ、お前達」

純はまた首を振り始め、

「違う」

「違う」

二度呟いたそのとき、純の中でギリギリと張りつめられていた弦が、ビンと弾け、切れた。

絶叫混じりに、

「違うぅぅぅぅ」

と叫んで通に掴みかかりそのまま腰を抜かしたようにしゃがみこんで子供のように泣いている。通は慌ててしゃがみこみ、純の顔を覗き込んだが、純は右斜め上の方に視線をやり、やっぱり大泣きをしながらかすれた声で、

「おねえちゃん~~~」

と泣いている。通が両手で純の頬を覆おうとすると、また絶叫してイヤがり、泣く。

「イヤだあぁぁぁ、通、イヤだあぁぁぁ」

ぐううっとかいう音をたてながら両腕を突っ張って通を押しのけようとする。舞のことが頭に浮かぶ、彼もいつかこうやって私に見切りをつける日が来るのだ。いつも私だ。原因は私なんだ。

私のせいなんだ。

単純である。解決方法その一である。通の唇が、純の唇に近づく、唇が触れるその瞬間、

「何が人がいろいろしてやったなの?」

初めて聞く純の強くて、早い口調。もう泣いていない。

「何でいつもいつもいつもいつもいつも俺があれした俺がこれしたなの?」

声のボリュームは上がる一方。

「お姉ちゃんと私を重ね合わせてたのは誰よ」

通を睨みつけている。どこかで知っている目だ。聞いたことのある声のトーンだ。止めようとする自分がいるのに、止まらない。

「誰がバカなのぉ。誰が何にもわかんないってぇ」

「何で、誰も私を愛してくれないのぉ」

止めろ、止めろ、もう嫌だこんな自分も……こんな自分も……浮かんでこない、他に嫌なものが浮かばないのだ。全てを憎み、全てを嫌っているはずが、この後に及んで自分しか嫌なものがないのだ。そうなんだ、自分自身でしかない、助けてくれ、愛してくれ、私の心はいつも、どこまでも、貪欲なのだ。

純は通の部屋を出ようと扉に向かった。通はそのただごとではない純の様子を見、純の前に立ちはだかった。純が右に行けば、通は左に、純が左に行けば、通は右に、純はそれに対し、癇癪を起こし、

「どけぇぇぇええ!」

やっと通は自分の行為が純の心をざらりざらりと逆撫でしていることに気づき、その純の叫びを最後に、道を開けた。

ゆるやかな坂道を下る。足早に下る。

「……」

母さんだ、母さんが、私の中にいた。私は母さんになったんだ。

大粒の涙がボロボロと純のスカートを濡らす。

舞のアパートメントに帰る。居ないとわかりつつも部屋をぐるりと見回し、とりあえずジャムを抱き締めた。顔を上げた純はジャムを膝に乗せたまま、電話の子機を手に取り、かつて押し慣れた番号を押す。

「はい、もしもし」

呼び出し音が鳴ったか鳴らないかのうちに、純の母親は電話に出た。その懐かしい怒ったような声を聞くと同時に純は我に返り、慌てて電話を切った。何をしようとしたのだ。自分が母親とは違うという再確認、いやもしくは、その心理は、計り知れないほどに根深く、目に見えない程に単純なのかも知れない。

純の心は吸い上げるように種々多様な情動を駆け巡らせ、もしそれらを、さらけ出すなんてことをしたとしても、自分がどうみられるかとか、そんなことはいたってどうでもよく、かえってその感情が醜ければ醜いほど見せつけることが出来る。最も屈折した素直な自分でいられる相手は、母親なのかもしれない。だが、彼女自身何が起こったのか分からないのだ。少しずつ少しずつ内側から何かに支配されて行っている感じが体を覆うので、まるでこの世界で一人、たった一人生きているようなので、暗黒の宇宙の中のよく分からないゴミやチリやらしか浮いていない空間に、自分という一固体しか存在しないような感覚にとらわれる。例え彼女のすぐ隣りには猫がのんきに寝息をたてていたとしても、その感覚は止まることはなかった。もうダメだ。

まだ、一度として使ったことのない『緊急用Ｏｎｌｙ』と書かれた電話番号のメモは、すぐ手の届く、枕元の棚の上にあった。舞の仕事場だ。

電話をしてみることにしたが、ここで少々ながらの不安が純をよぎる。もし電話をして舞以外の人がでた場合、いたずら電話と思われたり、子供のように聞かれたりして、電話を切られるやもしれない。なんといっても、とても人気のある、高級バーなのだから。純は大人の女性を演じなければならない、と思った。想像したるは、時代違いの羽のついた帽子を被っている由緒あるお金持ちの令嬢。出来るか？　いやいや頑張ろう。

呼び出し音が三度も鳴ったところで、

「はい、バーリトルドアです」

と店の騒音に負けないようにか、声を荒上げた女性がでた。

「あ、あの小倉さん、お願いしますぅ……」

「……」

変だったのだろうか、聞き方がやっぱり変だったのか、もしかして思った通り声が子供っぽすぎたか、

「恐れいりますが……」

「え？　あっぁぁ平岡と申します」

「……平岡さん、少々お待ち下さい」

保留音には、バーリトルドアの予約方法が流れる。『バーリトルドアにお電話有り難うございます。こちらに御来店の際は事前にレストランリトルドアのほうで御予約をしていただいております。電話番号は……』

ここの電話番号にはかけたってムダなんだ。この純が持っている電話番号だって本当はスタッフ用、または常連さんのみが知っている番号で、普通に調べたりして電話帳に載っている番号にかけ[illegible]同じものが流れるのだ。そこでレストランリトルドアにかけたとしても、『後程、スタッフが折り返し連絡を入れさせていただきますので、お名前、お電話番号、日時と、人数を残して……』などという留守番電話であった。ウソつきと純は心の中で呟いた。同じことが二度流れ、純は少しばかりイラついた。三度目が流れ始めたとき、舞が出た。

「もしもし」

舞の声は後ろのガヤガヤにかき消され、聞き取るのがやっとのことだ。

「もしもし……純」

こっちの声の方がでかくなってしまいそう。

「うん、どうしたの？」

「舞ちゃん、今いそがしいの？」

「うん、まぁ、今日はちょっと混んでてね」

「……」

「いや、何でもないんだけど、ちょっと声が聞きたくなっただけ、ごめんなさい、もう寝ます」

「うん、わかった」

すんなり切ろうとする、よけい淋しくなった。ついかすれた声で、

「舞ちゃぁぁん」

名前を呼ぶと、舞には純の切なる声が聞こえたはずが、誰かに呼ばれたのか、

「ごめんちょっとかけ直す」

電話が切れた。もちろんうるさく聞こえていた後ろのガヤガヤも、ピタリと止まった。

自分の身体を自分に、ぐいと引き寄せた。純の瞳は暗がりの中ギラギラと光る。電話が思ったよりでかい音で鳴った。条件反射で素早く子機を手に取り、弱々しい声で電話にでた。

「もしもし」

「……」

しかしさっきとは打って変わって電話の向こうは異常に静かだ。耳をすましてみても、まるで完璧なる静寂なのだ。悪寒が足先に走る。怖がりながらも、もう一度言ってみる。

「もしもし」

「……あんた今どこにいるの」

母の攻め入る強い声。

「は？」

困惑に重なる困惑。何故、彼女がここの電話番号を。今の今まで私を付け回していた。それとも探偵でも雇ったのだろうか。舞ちゃんに何かしたのだろうか。するのだろうか。

「番号が表示されるやつにしたのよ」

その純の困惑による沈黙に耐え兼ねた母親は、荒々しく種明かしをした。いつの間に、と純は思った。

「通くんの所はどうしたの」

「別に」

「別にって何よ、あんた今何してるの」

「なにも……」

「いいかげんにしなさいよ。あんた今どこにいるの。まさかまた変な男の所じゃないでしょうねえ。もうこれ以上許さないよ母さんは」

関係ないでしょと言いかけて、慌てて口を噤む。禁句だ。これを言ってしまうときっと彼女は待ってましたと言わんばかりに、純に暴言をまくしたてるだろう。
「もう、いいじゃない、どうでも」
「あんたそれ母さんには関係ないってこと？」
そんなに声を低くせんでも……怖い。
「……」
「今まで苦労して育てて来たのにもう親が必要じゃないとこんなに、ないがしろにされるとは、もう母さん死ぬから」
「ちょっと、もう」
「あんたの父親はねえ、好き勝手するだけして私を苦しめて突然死んで、その上実の娘にこんなに嫌われたんじゃあ生きてても仕様がないしねえ」
この分からず屋の母親に何と言えば良いのか、しかしながら腹が立った。
「恩着せがましいんだよ母さんはいつも、結局自分がどれだけ人にしてやったか、でしょ？ あれしてやったからこれしてやったから感謝しろってそれは押し付けっていうんだよ。本当に私があなたに何を求めてたかも知らないでしょう。ねえ、知らないでしょう、え？ ねえ、ねえぇ」
「……あんた、よくそんな恐ろしいことが言えるねえ」
「自分が人にしてあげたことは覚えてても、人にした仕打ちは覚えてないんでしょう。あっそれとも苦労した分チャラですか。じゃあ人生の選択の余地のカケラもない状況で教え込まれた憎しみと恐怖はどうすればいいの？」
「ああ、そうですか。悪いのは母さんだけですか。父さんは好きで母さんは嫌い、どうなったっていいのね。母さん死んでから後悔したって遅いから」
「ほら、そうやってすぐ自分が被害者……」
激しく受話器と電話機のぶつかる音がして電話は切れた。ああ何てことだ、何てことを言ってしまったのか、心が圧迫される背負うほどの重い罪悪感、膝に顔を埋めしばらく揺れてみる、そうしているうちに妙味（みょうみ）な孤独感が襲いかかって来た。首根っこを掴まれ、ぶらさげられているような感覚だろうか。静かだ、あんまり静かなので耳が痛い。
彼女は、母親が、純の後ろに立って上から見下ろしているような気がしたが、そんなはずはなかった。ただ、それ程の憎悪が純を襲った。怖い 怖い 怖い 怖い。
様々な感情がある。その複雑な幾重にも重なった螺旋状の無数の魂の中に、一脈の愛しさが潜んでいる。抱き締めてはくれないか、母の胸に顔を埋めたい。自分の醜態も、弱いところも、何もかもを包み込んで欲しい。これらは全て、得るべき時代に得るべきを得ず、あるべき形が造れず、そのあるべき形の流れは、決して止まることなく、変わり続ける。
フィルムの入っていない映写機と、それを必死に動かそうとする映写技師かのように、母親は母であるべき時を逃がし、子は子供でいられる時期を逃し、互いにやり遂げなかった使命なるものを本能的に、未だカラ廻りを続けながら必死にその空間を埋めようと、もがいているのかもしれない。
腐った土の上にはいつくばって涙しながら悪臭放つ湿った土に爪をたて、爪の中は寄生虫とギョウグヂュとした土でもういっぱいなのです。

純の背中を刺すように、攻撃的な電話の呼び出し音が鳴る。こんどこそ、と思い、電話に出る。
「……はい」
「純んん～～～睡眠薬と頭痛薬どれくらい飲めば死ねるかなぁ」
「頭痛薬じゃ死ぬわけないよ、いくら飲んでもね。全て飲み尽くしてもね。じゃ」
純だって、頭痛薬といえど、大量に飲んで、干からびた目玉のくりぬかれた魚のように長時間放置すれば、おなかが痛いと泣きながら、じいっくりと死ぬことを知らなかったわけではない。ただもう純からすれば、またですか、といったところや、嫌なことはもう全て受け入れません、と、今自分に起こっていることは全て〝ウソ〟なのだ。ウソなのだ。絶対そうだもん、といったところか。
「なんであんたはそんなに冷たいの……冷たいなあ、それがあんたの本性かっ、この悪人がっ」
「もう、わかったから」
「母さん死んでから後悔しても遅いからね」
「しないよ」
「……母さん死んで恨んで死んであんたの人生めちゃくちゃにしてやるから、おぼえてろおぉ」
電話はまたもや切られた。
クラゲは時折素敵な笑顔で黄色や青の渦をつくる。だけれど私は赤の渦の中。赤の渦の……それはきっと、あの水晶の指輪のおかげ。
電話が鳴る。電話に出る。
「――」
「あんたが、そんなふうに心の病気なのはね、純ちゃんのせいじゃない。母さんが悪いのね、可哀想な純ちゃん」
泣き始めた。好きじゃない、心痛む。悲しませないで、気にしない。踊り狂う。お家が火事にあった彼女は、ニコリと優しく笑い、太ったネズミと共に行くのです。私はもう話ができません。涙は何故だかたくさん出るので、悟られてたまるものかと、音を出さないように息を止める。
「母さんが痛い思いして産んだ子。かわいい子、大好きよ。母さん死んでも自分を責めないでね」
純は電話を切った。
側にあった『セキセイインコの飼い方』という本やらなんやら、とりあえず手の届く範囲の物を投げ散らし始めた。猫は棚の上に避難している。ヒョーヒョー声が出て、
「助けてええええ」
頭を抱え込んだ。二、三度深呼吸して、呪文のように唱える。
大丈夫 大丈夫 大丈夫 大丈夫 大丈夫 大丈夫 大丈夫 大丈夫？ 大丈夫なのか？ 何か低い唸り声がウゴウゴと部屋の中を這いずりまわっている。手を目の前にかざしてみる。足をそおっとすうっとゆっくりなぞる。
「何これ」
何なのだ。何がぶらさがっているのだ。重いし……邪魔だなあ。だいたいこれは誰のなんだ？ 私のものだとしたらもっと軽いはずだ。これは私のなどではない。私の身体はもっとこうガサガサとその辺の物をかき分け、見つけだしたるは、超特大カッター。

何だか少々嬉しくなってきた。左の二の腕の一番白くてやわらかいところに超特大カッターを押しあてた。ピッと弾力のある肌を小さく裂いた音がした。痛い。痛いので、手を止めたが、妙な快感は増幅されるばかり。頭のまわりでいろんな音や、小さな何だかよくわからない物質がヒョンヒョンと音をたて渦をまいている。浮かぶイメージ。死んで行く父親。私は怯えている。私もお前を置いていなくなるからと、私の目を見て言う母親。

　行かないで。置いて行かないで。そしてまた怯えてる。みせる涙の無意味さと私の発する言葉の無力さ。いやいやそれでも恨んでなどおりません、一度たりとも誰の事も。こういう時に良い思い出しか浮かばないのは、おもしろい。よく映画に連れてってもらったのはやけに覚えているなあ。ああ優しい言葉の一つでもかけてやりたかった。

「私は悪い人だ」

　頭を抱え込み、音を遮ろうと思う。

もの凄い爆音と共に誰かがドアを開いた。その音で大きく体は揺さぶり上がり、よけいにまるみ込んだ。誰かが、純に近付く。

「純……?」

　顔を上げられない。完全に塞ぎ込んでいるのだ。肩を掴まれ揺さぶられる。顔を上げるとそこには心配から顔がひきつった舞がいた。もう純の顔には恐怖はみられなかったが、瞳はどことも焦点定まらず、口をもポカリンと開いている。手先だけはしっかりと、舞の手を握り、震えている。舞はその背の高～い木の上の巣から落ちたヒナのような純をみて、自らを痛めつけたくなった。そして途方にくれた。舞は純の小さな体を引き寄せ、力まかせに抱き締めた。純は少々ながらに落ち着いたが、今この時を、一人行き場無く苦しんでいる母親の姿を思い、

「ごめんなさい　ごめんなさい　ごめんなさい　ごめんなさい……」

　と、ぼんやり唱え続けた。

　お姉ちゃんは、青空色のフィアット500と、でろりと深い赤の夕焼けの中に溶けていった。お姉ちゃんの大好きな青空色のフィアット500でお姉ちゃんは青空になろうとして、西の地中に沈み行く地獄の炎に無惨にも負けて灼熱地獄の鬼達に招きいでられたのだ。

9

　二日後の昼間、私達は外に出て、近所をフテフテと歩いた。手などをつないで歩いた。私の履く男物の下駄がゴロガラとうるさく鳴るおかげから、私達は口をきかなかった。暗い竹藪を通り越した所にある幽霊公園でのコンビニランチを済ませ、二人でバラバラの鼻歌なんぞを歌っていたら、えらく白いまつげの長い（二～三センチはある）クルクルに巻かれた白い毛に覆われた昼寝用の枕程の大きさの犬が、私達の前をウロついている。飼い主はいないのかと、辺りを見回してみたが、それらしい人物は誰一人としていない。それどころか、おかしい。いくら平日の昼間だからといって、さっきからこの公園の中には、舞ちゃんと、私と、先にある日陰の中のベンチで泥酔している浮浪者らしきおじさんだけしかいないのだ。

[illegible]私は、なんだきっとこの子は、私達がさっき食べていた弁当が欲しいのだなと、思い、さっきのゴミなどを入れたビニール袋に手を突っ込み、何かないかとさぐうてみたんだけれど、出て来た物は、プラスチックで出来た、あのギザギザの草のような、弁当の具の中身を区分けする緑のあれ、くらいだった。それにしても可愛い。仕様がないので、舞ちゃんと二人で、撫でたりして、かまってやった。犬はしばらく私達にごきげんな様子でかまわれていたが、突然釈然としない顔付きになり、どこかへ行ってしまった。私は、少し淋しくなって、なんだやっぱり食い物目当てだったのだなあと、自分を慰めた。

　空を見上げて、隣りの舞ちゃんを見て、舞ちゃんは私が見ていることに気づかないふりをして、前を向いている。人間嫌いの舞ちゃん、だと思う。彼は誰にでも優しく、丁寧だけれど、誰よりも人をそうそう近づけない、閉ざした感じがあった。前に彼のバーが混んでいない日に、仕事場に連れて行ってもらったことがあるが、酔いつぶれた奇麗（きれい）なモデルさんが、舞ちゃんに抱きついたときハハッと笑いながら彼女を突き放していたのを見たことがある。

「ねえ、人殴ったことってある?」

「……んん～、ないなあ。いつも殴るほどの興味がわかないからねぇ」

「……」

　私は一瞬舞ちゃんに殴られたいと、思った。

　舞ちゃんはもうそろそろ行くか、と私の手をとった。顔を前に向けたら、さっきの浮浪者らしきおじさんがゆっくり起き上がってこちらに向かって来るのが見えた。同じように気付いた舞ちゃんは、握っている私の手を優しく強く、握り直した。

　おじさんは、度重なる嘔吐と、尿で悪臭を放っていた。おじさんは、首を切られ、頭の頂部を皿状に切り抜かれ、脳みそをズルズルと食われているサルのような目をしている。舞ちゃんの顔を見ながら、おじさんはでかい声をだした。何か叫んだ。だが、何と言ったのか全く聞き取れなかった。そして私の顔をのぞき込み、

「なあんや、月の子か。太陽の子かわからんなあ」

　と、言った。そして私達二人に、大きめの声で、

「おっちゃん、ないがしろにしたらあかん、あかんでえ。つまずく石も縁のうちってな。こんな永劫より永劫に続く、時の流れん中にや、おっちゃんも、君も、君もや、今この時に、この幽霊公園におる。これよっぽど深い因縁やでえ。あれや同じ時代に産まれたってや、一度も顔見んと死に行く人が幾万人おるか。せやからおっちゃんになんか食わして」

　死んだサルの目でとっても良い笑顔。私はここの幽霊公園には、腹を空かせたものしかいないのかと、思った。とはいえ先客の可愛い犬にさえ何もあげられなかったものだから、どうしたものかと舞ちゃんの顔を見ると、

「ちょっと待ってて下さい」

　と、私の手を引っ張り公園の側のコンビニエンスストアに行き、タラコおにぎりと、ゆかりおにぎりを買って公園に帰ってくると、おじさんはさっきと変わらず、キチンとベンチの前に立って待っていた。舞ちゃんが袋ごと渡すと、おじさんは赤茶色の顔に、幾本もの深い皺をつくり、ゆかりおにぎりをほおばった。紫色のぶてりとした唇を横に伸ばし、奇っ怪な笑顔をつくり、呟き始めた。

「もう、八年間もここでこうしているのだよ。おっちゃんは、鎖も無いし、鉄格子も無いけど、もうずうっとこうしてるんや。こっから動かれへん。これからもずうぅっとや」

おじさんが喋らないと、この公園内は、静かで、何も動かず、私達の頭上高いところを安閑と雲だけが、しかしうぬうぬと地獄の渦（うず）んようにうねっていた。おじさんはゆかりおにぎりをゴクリと大きな音をたて、異常に突起した喉仏を上下に動かし飲み込むと、二口目をほおばった。

「おっちゃんなあ、若いもんがたれが好きや何や言うて、恋愛神聖を叫んで、蠢動してんのは、片腹痛い、ちゃんちゃらおかしい、ヘソが茶あ沸かすわ、思てんねん。本気や熱烈や言うて、固い誓い交わしたぁ言うても、たいがいは相対的。顔がいいやら、技量が優秀やら、それもこれも条件、みぃんな、条件あってのことや。そんなもんはなあ、右手　左手　右足　左足の　太っい動脈が情欲っていうでっかい手でピンッて引っ張られて、プラプラカクカクカタカタカタカタカタカタカタ操られてるだけやねんどお。結局は自己満足や。あほか。天地消滅。善も悪も美も醜も利害得失も年齢も道徳もない真実の恋愛を味わい得る人が、さああ幾人おるもんかなあ。動脈はいつか擦り減って、ブチ切れるぞおおお」

呼吸する間もなく降りしきる夕立のごとく話していたおじさんは、やっと大きく息吸い両肩が脱臼したように、両腕をダラリとたらし、私達の足下にグゴエッと嘔吐した。

10

アパートメントに帰ると、留守番電話の光が点滅していた。聞くと、純の母親の勤め先のもの と言う人からで、母親が頭痛薬を一瓶飲み干し、一週間ほど入院するとのことであった。メッセージを聞いた後、純が一人ホケーッと座っていると、舞は純の隣りに座り、純の頭を二度軽く叩いた。

黙ったまま、純の隣りに座ってくれている舞を純は感じた。ああ 私達はここに存在するのだ 同じ列車に乗り、同じ揺れを感じ、ゆうらり　ゆらり　ゆられているのだ、と幸せの沈黙とは、崇高なものだ、と純は感じた。純は何だか嬉しくなり、舞が愛おしくなり、でんでん太鼓の一振りのように首を舞に向け、古典少女漫画のような、満遍のない笑顔をしてみせた。薄暗い部屋の中、ほわりと映し出されている舞の顔。舞の顔はよくよく見てみると、暗い瞳をしていた。気の弱そうな中に、ギラギラと奇を衒った鋭さがあり、燃えたぎるキリンを見ているように時折悲しげで、それでいつだって、優しさでいっぱいだった。それが、先天的なものなのか、後天的に身についたものなのかは、皆目解らないが、その内には、孤独に似た淋しさのようなものがどよどよと、蠢いていた。

舞は眠くてしょうがない時の子猫の様に、体中の力を抜き、体育座りをしている純の腰に両手をまわし、ぽてりと脂肪ののった柔らかい下腹部に顔を埋めた。純はそれに答えるように、彼の獣のように柔らかい髪に指を絡め、頭を撫でた。彼はくつろぎ、静かに、低音で話し始めた。その声はなんとも心地の良いバイブレーション[illegible]、純の耳に届いた。

「仕事のせいなのかね。みぃんな打算的でねぇ……なんか、みんなよく笑うんだ声高らかに、がむしゃらに、共に笑っている人が誰とわからなくても……」

舞が、大きく息を吐いたので、純の下腹部はじんわりと熱くなった。

「何がそんなに楽しいのか、楽しいのが何なのか解らないから笑うのかって、そんなふうに周りの人間にイラついてると、実は自分が一番どうでもいい無意味な人間のような、行き着く所もなく、ずうぅっと、薄暗いバーの中に座って歳老いていくような気がするんだ。それでそれでそのまま……終わり」

舞はハハッと小さく笑った。

「たまに誰か俺の側に来て、どうしたのって薄ら笑顔浮かべて聞かれても、その周りでその晩つがいになる相手を懸命に捜されても、そいつらがいくら苦しんでいても、できるだけ上質の白い粉を出来るだけ多く買うことを年中考えてても、どうでもよくて……何かねえみんな必死なんだよ。んで、そうこうしていると、めまいがしてきて、周りの人達が、竹庵とか、お美代とか、ただ名前をつけられた、魂の無いマネキンにしか見えなくなって、世の中がザワザワ、ガーガーとラジオの局が合っていないような、テレビの砂嵐とか、雑音という雑音が混ざりあって、そのマネキン達は、カラクリ人形みたいに、超音速の速さでグルグルグルグル回り続けるんだ」

純は舞の髪を撫でるのを止め、彼の顔のパーツパーツ一つ一つを盲目の子供のようになぞり始めた。

「舞ちゃんは、カラクリ人形になれないから、カラッポなものはいらないから、淋しいんだよね」

純は、舞の鼻をなぞるところでピタリと手を止め、すねた子供のように下唇を突き出し、

「私もカラクリ人形かも……いつも必死で、グルグルグルグルグルグル回ってるかも……」

顔をうずめた舞の頬が動き、微笑んでいるのが分かった。

「違うんだよ、純は。君はもの凄く流れのきつい川の真ん中に立って、自分の身が、流されてしまわないように必死に頑張って。川の流れが気持ちの良いせせらぎになることを願い、未だ身動きのとり方を知らないんだよ」

舞はその時、純と自分をつなぐ決定的なものが何なのか、純の短い舌の裏に書いてあるような気がして、純の唇にソロリと触れてみた。

それから一週間、純は母親の見舞いに行くことは無かった。それどころか、純は何だか毎日うるさいくらいに元気だった。疲れはて仕事から帰って来た、嫌がる舞に飛びつき、舞の両手を持って、踊る。純は、舞の気難しそうにしている顔を見るのが嫌いではなかった。彼は、純の、その不安定な言動がどこから来るものなのか理解していた。

この一週間、毎日純の母親は病院の公衆電話を使って、電話をかけてきていた。毎日純自身の中で、そんな出来事は存在しないものと、言い聞かせ、毎日、多大なる罪悪感にさいなまれ、自らを責め、それをまた否定する連続なのだろう。

純は、とにかくよく笑った。気違いさながらに笑い、叫び、黙りこくった。何より彼女が暴れた際、押さえ付ける舞に暴力をふ

るった。純のおはこは、噛みつくこと、であった。
母の退院日の今日、例のごとく純は虚ろな眼で、大量の十円玉を数えたり、積み上げたり、きちんと並べたりしていた。その横で舞は寝転び、『火星の近代化』という本を読み耽りつつ、足で純のでっかいおしりをこずいていた。そのときスペインの海老のように濁った赤色の電話が鳴った。二人とも、でる気配は無い。留守番電話が答える。
ピー「……純？　母さんですよお」
茶目っ気たっぷりである。
「母さん今日退院するんだけど、母さん、純ちゃんに会いたいなあ。病院の中庭で、ねえ、誰かあ、いませんかぁ。聞いてますかあ、アハハ、純ちゃぁん。あのお……三時に、待ってます。来てねえ」
不自然に機嫌の良い声は、電話の切れた後もしっかりと耳に残った。純の虚ろな眼に変わりはないが、十円玉遊びの手は止まっていた。舞は顔を上げ、純の様子を見つつ、何らかの決着でもつけたかったのだろうか、純と母親の奇異恋愛のような関係に、もしかしてみると、純は、終止符を打つがために彼女は母親に会いに行きたいのではないか、舞は全力でさりげなさを、よそおい、聞いてみることにした。
「連れてってあげようか」
純は車の後部座席に座り、やはり焦点定まらぬぼやけた瞳のまま、顔や腕に比べると、異常に白い足を、運転席のほうまで投げ出している。舞は無言で運転しながらも、自分はきっと、この少女にただ何かしてやりたかっただけなのかもしれない。そんな動機から病院に車を走らせているような気がしてきたものだから、何だかやるせない気持ちでいた。迷路のように真っすぐでない細い路を幾度も曲がりに曲がって、舞は、今日という日はなんて緑の目立つ日だろう、と思っていた。
行きついたその病院は、白く高い塀と、白い建物、なにもかもが白と、緑と、ガラスの放つ乱反射で目が痛かった。舞は病院の入口で純を降ろし、車を停めに行った。
病院の中庭に立った純は今静かな興奮に駆り立てられていた。白い建造物を背に、母親は、小さい黒のボストンバッグを胸に抱き立っていた。純は自分の中で騒いでいる興奮に気づくこともなく、はたから見ればそれは何の感情も読み取ることの出来ない能面のような表情で母親に近づいた。
「子供は何も解ってないわ……」
純がもう母親の斜め前にいたのに、真っすぐ前をみつめ、母親はぼんやりとつぶやいた。
「……」
「……」
「今まで育ててもらったことに感謝の一つも無い」
「……」
母親はやっと純の方を見たが、何も言わないのに対し、純は今まで母に向けたことのないほどの強い目でしっかりと、見つめ返していた。それはどんな暴力や暴言の反抗にも勝る真の無言の反抗であった。しかし純は口を開き、
「何？」

[illegible]
[illegible]息をつき、
「私が本当に死んでたら、あんたは後悔でもしたんだろうけど……」
いやになる。いやになった。また急激に嫌気の波が純を襲ってきた。
「もういい？　ねえ、もういいでしょ。ああ、もういいわ私、じゃあまた、いつか」
そう言って大袈裟な手振りをし、綺麗なターンを描こうとしたところ、
「じゃあ、行こうか」
と、母は純に言ってのけた。純はさっきまでの、いや一週間前からの母の態度の豹変ぶりと、その早さに感心のカケラさえも、いだいた。だがやはり聞き間違えでは無かろうか、と。
「は、どこに？」
眉を歪め、聞いた。すると、母親は、胸に抱いたボストンバッグを赤子をおぶり直す時のように、ぴょん、と膝をバネに、抱き直しながら、爽快ぶった顔をして、
「帰るんでしょ。一緒に、母さんと」
ニコッ。
「いや……わたしは行けない、あなたとは」
母の爽快ぶった表情は、石膏の面でも割れるかのように、簡単に消えうせ、その下には、あばかれた怒りの表情が静かに現れた。
「男か……」
低く喉の奥につまる声で純を睨みつけた。純はどう答えるべきか考えた。無言の否定　男　憎悪　支配欲　どろどろ　どろどろ
[illegible]　どろどろ
許してはいけない。守らなければいけない。どろどろ　どろどろ
どろどろどろどろどろどろどろ　不純だ。
「ここに一緒に来た人？　その人がどうしたの」
あまりにもわざとらしいかもしれないが、そんな言葉くらいしか無難なものが、浮かばなかったのだ。母親は昔から、男のこととなると、血相をかえていた。はたからみれば、古風な考えの女性であったのかもしれないが、少々それとは違っているようである。母親も知っている通の場合、彼自身、母親に気に入られようと、純や睦よりも、その親に、えらく熱を入れていたものだから、彼は特別視され、おこずかいさえもらっているような妙な関係が出来上がっていたものだ。きっとそれは母親のスパイ買収のようなものだったのだろう。母親はお得意の脅しの目付きで、
「その人と何か変なことでもしてたら許しませんよ」
変なこととは何のことか、純の知ったことではなかった。
「まあ、じゃあいいわ。しょうがない、その人も一緒に行きましょ」

11

ハスキーボイスの男の歌と単調なピアノの音が流れる車内、舞は何も言わずハンドルを握っている。私は後部座席で腰をシートに滑らせすわっている。助手席には、上機嫌のニコニコ顔の母親がいる。母さんは生娘のようにはしゃいで病院での生活の話を一人早口にしている。
「あそこの看護婦さんダメよ。あれじゃあ、太ってるし……」

「人の世話する前に自分の管理しないと……あっ純ちゃんご飯はもう食べた？」
「うん」
　私は彼女の方を見ることもしないで、答えると、彼女は大声で「え？」と、耳の遠いおばあちゃんでもしないほどの聞こえにくそうな顔をつくって言った。私はこの落ち着かない状況に、じとりと汗ばんだ手をぎゅい、と伸ばし、母の大袈裟な身振りや口ぶりに無性に腹をたてた。私は、彼女のわざとらしいはしゃぎっぷりも大声も、どうしたって好きになれなかった。私は意識しないままに、もっと大きな声で、
「うん、食べた」
　と怒鳴っていた。母はそれに対し、
「何よう、その言い方」
　とかわいらしく怒ってみせた。母さんは舞ちゃんのほうに向き直りニコリ、
「あなた、お幾つ？」
「あ、三十二です」
　舞ちゃんはバーの仕事で身につけた笑顔で彼女にも優しく笑うのだなあ。
「あらっ、じゃあ、私と一緒じゃないホホホホホホホホホホホホホホホ」
　車内の曲をかき消すほどに高らかに笑う。はは……。私達は押し黙り、車内にハスキーボイスとピアノの音がもどった。するとまた母は、
「お仕事は？」
「バーのフロアマネージャーをやってます……はぁ」
「あら、かっこいいじゃない。じゃあ、今度おごってもらおうかしらん」
　ぱしり、と舞ちゃんの膝を叩いた。母さんは、馴れ馴れしく舞ちゃんに触れたのだ。なんだか私は彼に悪いことをしたような気がした。
「いいよお、母さんは行かなくて」
　私は声をまたまた荒上げてしまった。

　少々はずれているとはいえ、都心周辺に建ってある家にしては大きめの住み慣れたはずの家に帰ってきた。生まれ育ったその家は、もう、何十年と一人ぼっちで建っていたからっぽのホンテッドハウスのように私の目の前に、誰を迎え入れる様子なく、こちらを横目でみていた。母は舞ちゃんに小さな子供に言うように、「ありがとう」と礼を言い、車のドアを開け、左足を外に出して私のほうを横目で見て、ニコリと何らかの合図をしたので私はそれに答えるように「じゃあ母さんまたね」とニコリと笑いかえすと、彼女は車から完全に出て、目を見開き窓ごしに私を見下ろし、
「よっていくでしょ」
　彼女の見開いた目を見た私は、なおさら帰りたくなった。
「いや、もう行かなきゃ」
　私が言ったと同時に彼女は車の後部座席のほうのドアにガリッという爪で引っ掻いたような音をたて両手で掴みかかりドアを開けようとしたが、ロックがかかっていたため、彼女は「出なさい」と、ど低い声で、叫んだ。私は母の様子が、おかしくなる、という被害を、これ以上大きくしないためにも、慌てて車から出た。
「あんた何考えてるの。母さん今日退院したのよ」

　彼女の声は、私の耳、舞ちゃんの神経、狭い車、そして、私達を無視するように建っている家をキュイキュイと刺激した。怒鳴り声は嫌いなので、私は、
「母さん、声大きい」
　と静かに言った。すると母は、横目に私を睨みながら、
「いいかげんにしなさいよ」
　と今度は少々抑えた声で言った。だけれどまだまだ気が済まないらしく、彼女は続けた。
「だいたい一度も見舞いに来ないって、どういうこと？　私が今まで血を吐く思いで必死で働いてきたのもぜえええんぶあんた達のためだったのに、もう親がいらなくなったら無視か」
　母の一度抑えた声がまたどんどんと大きくなってきたところで、舞ちゃんが音をたてないように車から出てきた。母は怒鳴りながらもそれに気づいたらしく一息おいてまたまた、小さな子供に言うように、
「車ここに、停めてて大丈夫だから、ちょっと飲み物でも買って来てもらえないかなあ」
　と、ニコリ。
「何がいいですかねえ」
　くしゃくしゃの頭をさらにくしゃくしゃとかきながら舞ちゃんは背をまるめた。
「うん、何か適当でいいからあ、この路ずぅぅ〜っと真っすぐ行くと、ちっちゃな信号があるから、そこを左にまがったところに店がありますから」
　さっさと行けという感じは、あまりにもあからさまであった。
　舞ちゃんは明らかに困ったような表情をうかべながら頷き、私のほうに向き直り、その表情の印象を変えないまま微妙に笑顔を浮かべ、私に近づいて来た。その後ろで母はもの凄い形相をして私を見ている。私はいったい舞ちゃんが何をするのか解らず、舞ちゃんに、何？　というジェスチャーを、顔でやってみせたが舞ちゃんの表情は依然変わらず、私の肩に手を伸ばし、ふわりと優しく私を抱きしめ、私の耳元で「大丈夫？」と聞いた。私は、目の前にある母の顔を見つめながら小さく頷いたところ、舞ちゃんは体を、絆創膏をはがすかのように私から離して、そのまま母の横を素通りして行った。私はなんだか母に対して、ククククッと含み笑いの一つでもしてみせたくて仕様がなかった。こうなると、もうどうでもよくなってくるのだ。怖くないのだ。愛しき人を失う恐怖に勝るものなどないからなのだ。沼に浮く草や、山林の青葉が包まれるかのように、孤独なもの同士の持つ、鋭利なトゲが、心地良く、慰めのようでもある。幾年となく求愛の手を待ち続けたその長い長い時は、堅く閉ざされていた内に秘めたる空間は、無条件で全てを許し、無条件で全てを受け入れる。轟々と泣き止まぬ我が子が、今静かに腕の中で眠りにつくように、何もかもを包み込む母性のような愛に満ち満ちていて、さしのべられたその手に、一度つないだ求愛の手に、ただただ、すがりつくしかないのだ。
　だが私は遅かれながらに母の心情を察し、笑うようなことなどはしなかった。舞ちゃんの姿は、もう見えなくなっていた。母は、それを確認したらしく、私の方を見つめた。
「だいたい、何であんたはあんな夜の仕事してるような、浮わついたやつと一緒にいるの。今のも何だと思っているの。人のこと

なめてるわ、あんたもあんな奴にあやつられたりして、許さないよ。今すぐに母さんの所に戻って来なさい。」

　自分のことならよかったのだろうけれど、舞ちゃんのことを言われ、頭の中がささくれのような物でいっぱいになった。私は、甘やかされた子供がすねた時のように上目使いで母を見た。

「それは……出来ない」

「あんた、そうやってねえ、睦も母さんの言うこと、聞か……」

「もういいよ、姉さんの話は」

　今度は私の方が怒鳴っていたようにも思う。

「あなた達みんなして母さんをバカにしてるのかああっ」

　きっと母の顔も私の顔もぐしゃぐしゃに崩れていたのだろう。私達は一瞬見つめ合ったまま何も言わなかった。見ていた母の顔は突如として気弱にも泣き出しそうな顔になり、ブツブツと、

「私の純ちゃん　私の純ちゃん　私の大事な……」

　ジリジリと私ににじりよって来ている。私はだんだん自分の意識がどこで何がどうなっているのか、分からなくなって来ていた。気がつくと母は私の目の前に立っていて、両手で私の頬を覆い、

「今までごめんね、辛かったでしょう」

　母の目はその時ばかりは、木々生い茂る緑の濃い真冬の山のごとく冷たく落ち着き、私を包み込んだ。その時、私の中で、常に壮観と存在していた巨大な氷が、急速に溶け始めたのを感じた。それとは真逆に、そんな一言で救われてなるものか、いやしかし、何故こんなにもどうでも良いのでしょ。理性だとかましてや自制だとかいうものがごそごそと消えて行き、意識が遠くなって行くのがわかった。

気がつくと、目の前には、ほうぼうと赤色の地面が広がっていた。するとその地面から、モゴモゴと奇妙な人が生えてきて、ペコリと私におじぎをした。奇妙な人が言うのです。

「あなた……。……。……。人間止めますか?」

　私が何か言おうとして口を開いたところで、奇妙な人は、続けるのです。

「そこにいた五位鷺（ごいさぎ）に、あなた鳥やめますか、と問う」

　私達はしばし見つめ合ったところで、奇妙な人はまだまだ続けるのです。

「そこにいたリスに、あなたリスやめますか、と問う」

「……」

「……」

「五位鷺は答えます。私は、五位鷺として生まれたので、日々この悪臭放つドブ川の水面に映る我が姿を見ながら、五位鷺として死にましょう。リスは答えます。リスの毎日はシッポ、フリフリ小鳥と遊んでおります。いつ捕らえられ飢えの糧とされるやわからずとも、長くはないリスの命、リスとして生きて行きましょう」

　ほうぼうに赤い地面が粘着力のある、深い赤となり、私の足の裏に吸い付いてきたところで、私の唇がぬるりと暖かくなった。

　頭の中に声が響く、「お前は生かされていただけ。」

　目をしっかりと開けて見ると、母のどす赤い口紅の塗られた唇が私の唇をぬめりと暖めていた。きんきんに冷えた炭酸ジュースを脳内に注いだような鼻の奥を突く感覚と共に、今度は腹部にじわりと熱がこみ上がってきた。その熱は急速に私の中から湧きいでる。自分の腹を見てみると、そこにはでっかいハンティングナイフがいきり刺さっているではないか。顔を上げると、愛しき母の肩ごしの遠方に、舞ちゃんの姿が見えて、その時、胸が一つト[illegible]

12

　ズリズリと崩れ落ちる純に気づき、舞は駆け寄った。母親はその舞に気がつくと、必死に純のぱかりと切れた腹にきつくしがみついた。舞が近づくたびにその腕はぎゅいぎゅいと純の腹を締め付けた。

「お前か！　純ちゃんと私を引き離すのは！　もう一緒にくらすんだから、この子が私を幸せにするんだからあああ。向こう行け！　人さらい！　警察呼ぶぞ！……」

　罵声に、罵声をあびせかけ続け、ヒステリックに純を離そうとしない、純は母親の腕の中、苦しそうではあるが、あまりにも力無く、舞と母親の顔を見ていた。舞はスタスタと母親に近づき、拳で彼女の左頬を力いっぱい、上から下に殴りつけた。ひゃあという少女のような声を上げ、路上に顎を叩きつけられ、ぶざまに転がった。舞は力無い純を抱き上げ、歩き始めた。後ろ手に母親の声は響く。

「何故私を置いて行く。なあぜ、私を置いて行くぅ人さらい、人殺しぃ……」

　車に乗り込んだ舞は、意識のあるかないか分からないほどの純の頭を自分の膝の上にのせ、得意の弱った顔をして、

「もう一発くらい殴っとけばよかったかなあ。なあ純」

　舞は目を閉じる純の唇にそっと触れる。短い舌の裏を見てみた。純と自分をつなぐ決定的なもの。そこには、『もういっかい』と描いてあった。舞が純の舌をみてみると、純はやはり笑っていた。純は薄目を開けて、

「何度でも会いたいなあ」

ともう一度笑った。

一九九九年一〇月二九日　文子

平成12年11月25日発行

定価：1,050円（本体価格1,000円）

監修：庵野秀明
原作：藤谷文子 ©2000 Ayako Fujitani
スチール撮影：長田勇市
（表紙、P.1〜3、20〜21、40〜41、59〜61、63〜65、67〜72）
編集：徳木吉春
編集担当：筒井亮子（スタジオジブリ出版部）
デザイン：グルーヴィジョンズ
発行人：鈴木敏夫
発行：スタジオカジノ（株式会社徳間書店 スタジオジブリ事業本部）
〒184-0002 東京都小金井市梶野町1-4-25
電話 0422-60-5630
©2000 STUDIO KAJINO

印刷・製本：図書印刷株式会社

「式日」©2000 F&A・STUDIO KAJINO

原作となっています「逃避夢」は、
反対側からです。

はじめに

このお話は、私が十七歳の時に書きはじめたもので、そこからは、誰にせかされるでもなく、しかし、自らの背を押す様に、書き進めたり、止めたりをくり返しながら、十九の末の頃、やっとこさ完結したものです。

私は、学校という場においては、常に、こよなく「国語」という教科を好きでおりましたが、それと逆に、私はいわゆる「キチンとした文法」や「正しい文章とは？」なるものには、何故だか興味がわきませんでした。

中学受験の時の国語のテストで出題された一問で、私の答えが間違っていた。時の解答に未だ納得していないからか？しかしながら私は、人間の心や頭から発せられる「言葉」が好きです。そのヒビキも好きで、「夢想」や「空想」、中でも「現実」というものは、恐ろしい程に興味深く、感嘆の声をあげたくなる程、ありながら、常に私の側にあります。ついでに、「妄想」なども大好きです。あの頃の私は、それらのもので構築された世界の中に住んでいた。そして、何をするでなく、何をしても、そこから抜け出せないでいた。どこかで何度も聞いたコトのある言葉を思い出した。何事も、結果が出ればよい。結局、何と言われようが、一番になりさえすればよいのだという。そんな言葉を思い出したら、嫌な気持ちにみまわれた。結果をだすことの出来ない、一番になれない自分は、どうすればいいのか、困惑して、苦しまぎれに私は、自分の頭上に張りめぐらされた言葉達を、書き記し続けることにした。ちゃんと、完結しないでなるものかと、思っていたのだろう。そうして出来た、このお話、よく言われる結果なのかというと、少し違う気がするが、これから、「逃避夢」を読み進んで下さる方、読み苦しい点、変な文章などと思われる点、多々に出てくるやもしれませんが、私は、あの十七、十八、十九歳の、文子、という女の子の、想いや、考え、計算や、打算といった全てを、少しでもくみとるべく、まことに勝手ながら、彼女の言葉を、一語、一句変えることなく、こうして本にさせていただきたいと、思います。

そして、それを寛大にも、読んで下さる方。すみません。

ありがとうございます。

藤谷　文子

逃避夢

藤谷文子

1

「ねえ姉さんが死んでどれくらい経つんだっけ」

慣れないタバコを片手に、まだタンクトップに青空色の下着姿の平岡純十八歳は、日が傾きかけているのが見える三宅通三十三歳の古ぼけた六畳もない部屋に、体育座りというやつをして、ぼんやりと言った。通はカビ臭い布団の上にうつぶせになって、めんどうくさそうに大きく息を吸い、

「二年……経つかなあ」

と言い、首の向きをかえて、ウトウトし始めていた。

姉さんは、青空色のフィアット500に乗っていた。二年前、十八歳になってすぐ免許をとった姉が、フィアット500を買うと言い出した。私は、ルパンみたいに、黄色がいいって言ったのに、青空色じゃないとダメなのと、私に笑って見せていた。

母さんは、よく解っていなかったようで、PTA会長の三村さん家の、御主人が車に詳しいと聞いて、ワザワザ訪ねて行き、五時間くらいして帰って来た。いつもそうだ。三村さん家に行くと、そこの奥さんと話し込んで、夕飯時をとうに越えて帰ってくる。

「あ～三村さん家に居ると太っちゃうわあ」

コーヒーをすすりながら、毎回同じことを言う。

「あっ、それから睦」

姉さんは一月生まれだから睦だけど、私の場合、男の子が生まれると思い込んでいたらしい。母さんが呼んでも返事が無かった。姉さんはよくヘッドホンで、へんなアシュリースターとかいう女性のジャズを聞いている。

「ねえ純、ちょっとお姉ちゃん呼んできて」

母は立ち上がり、猫の絵がいっぱい描いてあるエプロンに手を伸ばした。

「あ、私もう食べたよ」

「なあんでそんなことするの」

と、母はまるで今、夕方の四時みたいに言った。

「だって、母さんが遅いんじゃない。今もう八時半過ぎてるよ」

私は言いながら二階に上がりかけていた。

「じゃあ睦は」

何に腹を立てているのか、怒ったように話すのが癖なのか、いつもそう、私はそれが好きじゃない。

私は母さんより父さんの方が好きだと、十三歳くらいまでは思っていた。父さんは、私が十歳の頃、家からそんなに離れていない道の真ん中で水たまりに顔を突っ伏して死んでいたらしい。酔っ払っていたそうだ。

その三日後の晩、私がお風呂に入っていたところに、母さんが、半狂乱になって風呂場に入ってきて叫んだ。

「出なさい早く！　死んじゃうでしょ、溺れるじゃ無いの！　何してるの、早く！　はやくうううううううう」

私は、湯船から出なかった。ただ、母さんの見開かれた眼を見ていた。母さんは、突然二階に駆け上がった。私が、慌てて服を着て後を追おうとしたら、上から母さんに腕を引っぱられた姉さんが、階段を降りて来ていた。

「お母さん！　お母さん！」

私を無視しているというよりは、聞こえていないようだった。

母さんは、姉さんを、外へ連れ出し、無理矢理車に押し込んで、血走った目で姉さんに、

「お前が悪い！」

と、叫んだ。とっさに私は、母さんの腕を掴んだ。

「止めて、止めてようぅっ」

言った瞬間、母さんはバッと首だけこちらに向けて、

「お前もか！」

と言い、私を掴んで、車に押し込んだ。

「お前らなんか捨ててやる」

かあさんは運転席に乗り込み、車を走らせた。行くあてなんて無かったのだろう。一晩中走り続けたあげく、すっかり、母さんの人格はもとに戻り、家に帰って来た。

母さんと、父さんの間に何があったのか、知らない。母さんから毎日のように聞かされてきたが、どれが本当の話か分からないし、今となっては、大の大人二人のドロドロ話など、どうでもよかったりする。

コンコン。姉さんの部屋は二階の左奥に在る。ちなみに私の部屋は、父さんが死んでから使わなくなったガレージにほんの少し手を加えたものだった。だから夏は死ぬほど暑くて、冬は痛いくらい寒い。

「お姉ちゃん」

答えが返ってこないので、もう少し大きな声を出そうと、息を吸ったところで、ドアが開いた。

「また、あの曲聞いてるんだ」

「うん」

と、姉さんは、自分の足先に目を落とした。「何？」と、顔を上げた。

「あ、母さんが呼んでる」

ふうと、軽く息をついて、一度部屋に戻り、音楽を止めて出て来た。

「ありがと」

と、一言。なんで姉さんの部屋はいつもいい匂いがするんだろう。

「フィアットはダメよ、小っちゃいから危ないし、すぐ壊れるし、なんか新しい車にしなさい」

子供達が、自分で何かを選択したり、ましてや自立しようという素振りを、少しでも見せようものなら、彼女はまるで定められたことのように、躍起になってそれを阻止しようとする。もしそれが、自分の調節可能範囲内なら、どうせ失敗するだろう、でもまあ勝手にやらせてみようと、笑ってみたりする。そんな時の彼女の笑顔を見てしまった晩は、必ず悪夢を見る。

「お願い、母さん、大丈夫だから。私が安全運転しかしないって知ってるでしょう」

正直驚いた。姉さんは昔から、私とは違い、母さんの言うことはよく聞くほうだった。結局姉さんは、一晩中ねばって、思い通りの、青空色のフィアットを手に入れた。と、言っても、もともと青空色だったワケじゃあなく、白色だったものを、姉さんが特別にきれいな青空色を注文して、ペイントしたものだった。

「何？　突然、ってより、なんで覚えてないの？」

眠そうな声で通は、言った。部屋には夕日が差しかかってきていた。

「うん」

窓の外を見てみると、風のまったく入ってこないこの部屋のムシムシした感じと、夕日の色が、妙に純の息を詰めた。

「姉さんの青空色のフィアットと夕日はとても似合っていた」

返事はなかった。

純が自分の足の爪で遊んでいると、

「俺、ちょっとコンビニ行ってくる」

通はムクリと起き上がってジーンズをはき、さっさと出て行った。一人純は、足の爪をいじり続ける。純の心の中に、ズンと大きな鐘が置かれた。

ああ、まただ。一人、他人の部屋に悪態づかれて、置いてきぼりされて、淋しくてしょうがなくなってきた。何でまた、お姉ちゃんの話なんかしちゃったんだろう。通はきっと、夜まで帰って来ない。雷かなんか突然ここに落っこちてくれれば、そしたらきっと、帰って来るかもしれない。

夕日がデユルリと落ちて行くよりずっと急速に、闇は、純の心をすっぽりすっかり覆った。通は帰って来ない。何で私はこうなんだ。彼女の耳の中には、大勢の人が住んでいて、時に、その人達は、一斉に話し始める。その声は、みんなおばさんで、彼女達は、純の耳の中で井戸端会議らしきものを延々するのだ。今は、この上なくうるさく、何を言っているのかは、全く聞きとれない。

「止まって　止めて　止めて」

頭を振ってみたり、聞こえないよう声を兎に角出そうと、

「ああああ～～～ああああ～～」

低い声を、震わし出してみる。おばさん達は、一向に止めようとはしない。純は暴れ始めた。右へ左へと腕を振り回した。ガシャン　振り上げた右手が、この薄い窓ガラスを突き抜けていた。

「あ、止まった……」

腕からは、血が結構な勢いで出ている。

「部屋汚しちゃうなあ」

腕はまだ窓から突き出たまんまだ。足を目一杯伸ばして、灰皿を足の先で取り、灰皿で血を受けながら、ドアの側に落ちてあるタオルを拾い、とりあえずそれを腕に巻いた。もそもそとジーンズをはいて、アパートメントを出た。血はすでにタオルにうき出てきていた。

2

一人、外に出てみて、今まで意地でも帰りたくなかったあの家に帰ろうとしていることに、純当人が、少し不思議に思った。そうだこの流血を期に、きっと母親も怒らないだろう。小学校低学年でも、今どきの子なら持たないであろう安易な思考。いや、それどころか彼女に心配というものをしてもらえるのではないか、という期待に胸を膨らませた。ひさしぶりの家の戸を開けると、中は真っ暗で、玄関はまるでこの家が大家族かのように、大量の靴が散乱していた。ドクッ　ドクッ　ドクッ　腕の出血が音となり耳に届く……。

純の母親がほんのりと頬を赤く染め、疲れはてた様子で帰宅した。すぐに純が帰ってきたことに気づき、純の部屋に行ってみるが、そこに純の姿は見当たらない。台所のほうに戻り、イヤリングをバチンバチンと取り、テーブルの上に無造作に置いた。もしや、と思い睦の部屋に行ってみる。容赦無しに部屋の戸を勢いよく開くと純は部屋の真ん中に、ペタリと座っていた。戸が開くと同時に、何とも嬉しそうな顔で、純は振り向いた。その表情は幼かった。

「おかえりなさい」

腕のタオルの血は、変色して、苦い味のするチョコレートのような色をしていた。

「どこに行っていたかなんて聞きたくもない。汚らしい、この親不孝もんが！」

戸を開けっぱなしで、母親は、サッサと下に降りて行った。残された純は、よいしょ、といった感じで立ち上がり、下に降りた。母親は、すでに着替えており、ブランデーを飲みながら化粧を落としていた。

「母さん」

答えない。純は少し母親に歩みよりつつ「ねえ」と腕を突き出してみせた。母親はめんどうくさそうに、やっと顔を上げ、純の腕を見た。

「ちょっと、あんた何してんの！」

慌てた彼女は、純の腕を力まかせに掴んだ。

「痛っ！」

その声は小さかった。母親は純を流しに引っ張って行き、タオルを乱暴に取った。赤黒い血はまだ、純の腕からでていた。母親は傷口を洗おうとしている。その間、純はずっと、彼女の顔を見つめていた。

純は自分の部屋にあるだけのローソクに火を灯し、冷たい床に寝転んで、赤く塗られた天井を見ていた。それは彼女が、自分で一生懸命塗ったもので、その日はシンナーの匂いで、一日寝込んだりした。「青、青空色、赤、アシュリースター、砂の扉、長い牙、足、一酸化炭素、黒い石、ツルツルの黒い石」

純はめずらしく機敏に、体を起こし、部屋を出た。リビングルームには思った通り母親がまだ起きていた。ウイスキーを飲んでいる。母親の姿を見た瞬間、純は凍りついたように体が硬直してしまった。

「純ちゃあああん」

ご機嫌な甘い声を出している。後ろから見るテーブルに、覆いかぶさっている彼女の背中は、でっかいコブかなんかが生えている異様な生き物に見えた。彼女は、左腕をぶらりと振り上げ、バンバンとテーブルを叩き、こちらに来い、という素振りをした。純はいったん冷蔵庫にたちより、牛乳を取り出し、母親の斜め前に座り、彼女の目をみたまま牛乳パックからそのまま口飲みした。

テーブルの上には最低二日はたってそうな食べ物があったり、最後に使ったまま、小さく折りたたまれた上、ぎゅうっと握った形の台拭きが、完全に乾燥し、カチカチの状態であった。母親は、嬉しくてしかたない様子で、まだらに赤い頬と、黄ばんだ白目で、最上の笑顔を浮かべた。

「あんたとねぇえ、睦は昔から仲が良くてねぇえ」

そうでもなかった。とりわけ毎日喧嘩をしていたワケでもないが、仲は良くなかった。純は母親の顔から、目線を外そうとはし

なかった。
「あんたの小っちゃい頃は可愛くてねぇえ、いつも母さんの真似してねぇえ、睦の世話しようとしてねぇえ、字も読めないのに、お姉ちゃんに本読んだげようとしたりして、睦が、嫌がっても、嫌がっても、あんた止めないから、クククククククク。睦は、本全部捨てちゃったのよねぇえクククウクククックククッゥクックククク」
純はそんな母親を見て、微笑みさえ浮かべていた。立場が逆転していた。もしかしたら、ずうっと以前から、母親は、純の子供のように、純に甘えたり、愛情を欲したり、ダダをこねたりしていたのかもしれない。
母親がもう止まらないのかと思う程、笑いだしたかと思うと、その表情は、突然憎悪で、いっぱいになり、空を、見つめている。ああ、この目は、彼女が昔、時折りみせていた、もう一つの顔であった。
「あのねぇ純、睦は、母さんの言うこと聞かなかったから、ダメだったのよ。あんたも、後で、後悔したって遅いのよ！　ちゃんと母さんの言うこと聞かないと、あんたも、お姉ちゃんと同じことになるわよ！」
そんな母さんの言葉に、恐怖を覚えた。母親の言うように、お姉ちゃんと同じになるというものになれたら、どんなにいいだろうと思った。
「わかってるの？　あんた学校だって行ってない……」
「なんでだろう」
純はゆっくりと口を開いた。
「何でいつも、そんなん、なんだろう、お姉ちゃんは母さんの娘なのにさぁ」
語尾の声が裏返ってしまった。
「あんた私がたまに学校の話したらうるさがって、話をかえるな！　おまえは」
「ちがう……」
「まあ、あんたも睦も、あの男の血をひいてるしね」
心がブルブルと小っちゃくなっていく。
「お母さん、私は大丈夫だよ。あ、私ね、料理一つ覚えたんだよ、だから今度……」
「あんたが怖いのよ」
その表情は、本当に怯えたように、今にも食いかかって来そうに、純を睨みつけていた。純は家を出た。なまぬるい、肌にねっとりすいつくような風。
「上弦の月、錆びたパイプ、クラゲの笑顔、絵かきの譫言」
悔しさが、胸の中でモワモワと蠢いている。
こんなことで、悲しくなってたまるか、あんな母親に今更何を求めていたのか。純の心の葛藤は、彼女の顔を、まるで、青いカプセルをコーヒーに溶かしたように歪める。自分がまるで、抜け出ることの出来ない、小さな町にある、人目につかない古い映画館の中にいて、暗くて、いやあな映画をただただ観ているような気がする。映写機は狂ったように、止まることなく、鈍い音をギーギーと放ちながら、スクリーンには、観るに耐えない可哀想な子猫や、虐待されているサーカス団の象や、やけに希望を持たせる優しいパパと、子供達の団欒映像が、映し出されている。その映画館の外に出ることさえすれば、全てがウソであったように、太陽の光照る、優しい風が、純を包み込むような世界があるはずなのに……。その映画館の扉は、固く、重く、決して、開かれない……。

3

コーヒーをすすり、少し渋い顔をしてみる、ボサボサ頭の男、小倉舞三十二歳は、週に一度の休みの今日、十二畳程ある自室で、何をするでもなく、一人で過ごしていた。
「タバコは……と」
タバコを切らしていることに気づき、ボロボロの、白いスニーカーを履いて、外に出た。黒のTシャツに、灰色のダボッとしたトレーニングパンツ姿の舞は、猫背で、そのボロボロなスタイルが、可愛らしい。
純が、フラフラと、力無く歩いている。どのくらい歩いたかは分からないが、彼女の、今日の出血した量からすると、これ以上歩くことが、出来なくなっていた。
目の前に、煌々とコンビニエンスストアが建っている。純は、店の前にある【カン・ビン・もえるゴミ】と書かれたゴミ箱の横に、座り込んだ。闇の中から店の方に向かってくる男がいる。何だかどうでもよさげな見た目の男、小倉舞だ。誰にでも純の姿は目についた。舞と純の目があった。舞は反射的に目を離したが、純は彼を見つめている。その純の横を舞は素通りして店の中に入って行った。
「フィリップモリスください」
「うち、タバコあつかってないんですよぉ、すみません」
学生らしきアルバイトはペコリと頭を下げた。
「あ、いえ」
舞も頭を下げた。その様子を純は首をめいいっぱい後ろに回して見ていた。舞が出て来た。
「タバコ、置いてなかったの？」
「あ、君持ってんの？」
首を横に振る純。
「そっか」
「ごめんね」
純は申し訳なさそうにニコリとした。舞はその笑顔を見て、幼少の頃によく作った化学薬品の匂いがプンプンするシャボン玉を思い出した。いくら飛ばせど、振り返るともうない……舞は道端で見つけた猫に近づくように純の隣にしゃがみこんだ。
「こんばんは」
と純は嬉しそうに言った。彼女はたった今雨が降っていれば、一緒に雨宿りでもいかがですかって誘えるのに、なんてことを考えていたところだった。
「こんばんは……君、大丈夫？　なんか辛そうだけど」
その時、何故だか舞は純のふくれた唇の隙間にチラリとのぞいた乾いた前歯を見た。
「うん、あのねぇ血が足りてないみたい」
「病院とか、家帰るとか」
「今日はお家が火事になっちゃって、帰るところもないしここにいるんだけど、病院は行かないんだ」
舞は困った顔をして立ち上がった。
「歩ける？」
舞はその聞き方があまりにもぎこちなかったせいか、その少女

を誘拐の一つでもする気でいるような気がした。純はニコリと微笑みながら首を横に振った。街灯の光が闇の中にポツリとある。タバコを買えなかった男は少女をおぶって歩いて行く。

「私、純っていうの」

舞は鼻で笑い、

「男の子みたいでかわいいねえ」

純も鼻で笑い、

「あなたは？」

「舞」

ムフフフフ、純は舞の肩に顔をうずめて笑い、

「女の子みたい」

舞の部屋のドアが外側に開いた。月の光が部屋の一部をぼんやりと映し出した。器用に足でドアを開け中に入り、ドアの横にある背の高い電気スタンドの明かりをつけた。黒くて細いポールの上に大きな濾過器をくっつけたようなもので、ポールの所についてあるつまみで明るさを調節できるものだ。舞は部屋の明るさを極力暗くした。ぐったりしている純を、まだ首のすわっていない赤ん坊を扱うように布団の上に寝かせた。ポフって音がした。舞はいつも布団の右側で寝ていることが分かった。白いブランケットのちょうど右側だけが人一人分だけめくれていて、残りはホテルのベッドのようにマットレスに繰り込まれていた。

「何か飲みたい？」

純はぐったりしてるわりにはニヤニヤした表情で、

「ううん、いい」

「本当に？　何か買ってくるよ」

純は少し慌てた様子になり、

「大丈夫だよ、本当に」

舞の行動を阻止した。純は寝ころんだ体勢のまま見える範囲をくまなく見回した。テレビやCDプレイヤーがフローリングの床の上にそのまま置かれてある。冷蔵庫がないことに気づいた。窓のブラインドは閉められており、その横にある白い本棚の下から二番目の棚にコーヒードリッパーがある。その上の棚にはUFOキャッチャーのミニチュアなんかも置いてある。

「じゃ、テレビ見よっか」

リモートコントローラーを探す。もう午前四時をとうに過ぎてるはずなので純は、そろそろ寝なさいよって言っているような曲と一緒に淡々とやっている天気予報ぐらいしかやっていないんだろうなあ、なんて思った。テレビを点けてみると、何だかどこぞかでいろいろと見たことのある小柄なメキシコ人が、白人の大男五人に袋だたきにあっている刑務所映画をやっていた。舞は純のほうに顔を向け、この人実生活でも刑務所に入ってたんだってね、と笑って見せた。純は疲れきって眠気もあるはずなのに、暗い部屋に不規則に光るテレビのストロボが目の中にチクチクと刺さってきていて、映画の内容は全く頭に入ってこない。無性に眠い。眠れない。俳優達の発するセリフの、一言一言が、宇宙人かなんかが超音波でも使って、何らかの信号を純の脳髄に送っているようにしか聞こえなかった。ふと舞を見てみると、彼もまた、テレビを観ているように見えていたが、天井を見つめていた。何か考えているのだろうか……。純は、ぐぐっと目一杯体をまるめ、ブランケットに顔を埋め、目を閉じた。

月の明かりだけで十分明るい通の部屋。割れた窓ガラスの前にしかめっ面で、立っている。ガラガラガラガラガラ。まるで気を落ち着かせるための様に、割れた窓を開けたり閉めたりし、グルリと部屋を見渡して、舌を打った。

4

舞の布団の上に、上半身だけを起こして座っている純。一つしかない黒いエルヴィス・プレスリーのまだ痩せている頃の写真がプリントされているマグカップでミルクを飲んでいる。その横でボサボサ頭の舞は、タバコを吸いながら天気予報を見ている。というよりは、目をやっている。純が膝を起てると、白いブランケットが四方から引き寄せられた。

「ねえ、お仕事何してる人？」

舞に聞いているのだが、彼女の目線はテレビで、マグカップの中に口を入れたままモゴモゴと言ったので、別に本当に聞く気があるようには聞こえなかった。だが舞はほんの少しの間を置くこともなく、何か企んでいるボサボサ頭の少年のような顔で笑い、言った。

「見世物小屋って知ってる？　知らないかあ、君は」

「知ってる……お母さんが、何か言ってた」

いつだったか、まだ睦と純が幼かった頃、近所の神社の秋祭りに行ったとき、母親が焼きとうもろこしを買って、一本を二人で分けるのよ、と言いつつ、真っ黒な人込みの中を歩いているとき、彼女が睦の歳の頃一度だけ行った見世物小屋の話をしていた。彼女の伯父は、京都大学の医学部を出て、大学院も出て、博士号も持っていて、という人らしいが、純や睦が会ったことはなかった。その彼が大学に入ってやっと落ち着いたっていう頃実家に戻って来て、幼い母親を近所の夏祭りに連れて行った。見世物小屋は屋台がズラリと並んでいる道を一つ裏通りに入ったところにあって、彼女が覚えているのは、中に入るとやたらと暗くて、たくさん人がいて、何も見えなかったことらしい。彼女は見世物小屋のことを、悪魔の商売、と呼んでいた。

「僕の時代にも、もうほとんど無かったんだけどね、実は今もあるんだよ見世物は。僕は見世物になる人を捜す人。だから君を拾ったの、猫娘になれるからね」

舞はそう言って、上目づかいに純の反応を待っている。純はその様子を見て、やっと感づいたのか、

「うそだあ」

「うそだけどね。でも僕の母さんは本当に蛇女だったんだ。小っちゃい頃は小屋の人達みんなで住んでたんだけど、何かね、炊飯器に一カ月以上放置されているゴハンのモア～ンって感じの匂いが時々してたんだよなあ。父さんはそうして見世物になる人を捜して来たりもしていたんだけど、客引きもやってたんだ。普通はねアラダンカって言う客をまくしたてるように景気良くしゃべるもんなんだけど、父さんの客引きはいつも、ナキゴマセっていわれるやつだったんだ。ナキゴマセって客の同情を引くように喋るんだよ……僕達は、父さんにとっていつでも可哀想だったんだ。僕達の部屋はいつも蛇でいっぱいだったんだ。僕が八つのとき、子猫を拾って来たんだ。押し入れの中に隠してたはずなんだけど、次の日の朝には猫も蛇も死んでたよ。もの凄く怒られたけど、そういえば母さん見たんだって、夜中に僕の枕元で踊り狂う蛇の影

……」

純は朝っぱらからの舞のトッピな話をサザエさん一家の話でも聞くように普通に聞いていた。

「父さんはその頃、人間ポンプの上を行く人がいるんだって、その人を見つけることばかり考えていたんだ。僕が生まれる十年くらい前に新聞の小っちゃい記事で読んだんだって。その人の名前だって今でも覚えてる、毎日のように聞かされたからね。村田小作さんっていってねハハハハハ。その村田さんはカミソリでもクギでも、その辺のサラリーマンの眼鏡でも食べちゃうんだ。あ、こうもり傘のホネってのもあったなあ」

「ガッチャンみたい」

「ん?」

「その人、ガッチャンみたい、あられちゃんの」

「……本当だ」

舞は純を見てまたよく笑う。純は舞を見て、

「猫娘かあ」

ニコリと笑い足の爪をいじり始めた。

「僕はね、小っちゃなバーでフロアマネジャーをやってるの、っていっても友達がやってる店だから好きなときに顔出すだけでいいんだけどね、本当は。まあ、することもないから毎日行ってるけどね。やけに人気あるんだよねそこ。なかなか入れないんだよ、誰かの顔見知りだったり、僕が気に入ってる人とか? ハハッ、小っちゃくて、中も暗くて、することといったら酒飲んでタバコ吸っておしゃべりくらいなのに、なかなか入れないとなると、入りたがるんだよねえ、人って」

そう言って何だか情けなさそうな顔をして新しいタバコに火を点けた。このタバコと牛乳は、朝、純が買ってきたものだ。舞が目を覚ますと、純が居なかったので、猫娘を拾ったのは夢だったのかとボーっとしていたところに純が、タバコと牛乳と、焼いたレバーをたくさん買って帰って来た。天気予報が終わり、やたらと声の高い新人と思われる女子アナウンサーが「みなさあんぁけびってご存じですかあ」と棒立ちになっている農家のおじさんの横で叫んでいる。そうして、舞はシャワーを浴び、仕事に出掛けた。

「舞ちゃん、お姉ちゃんみたい、いい匂い」

5

ダラリと暖かい日が、京王線の揺れる電車の中に入って来ている。心理テストか何かでホノボノした光景を思い浮かべて下さいと言われて、イメージするような車内に純はいた。車両の進行方向一番手前の席の端っこに、行儀よく座り、電車の揺れに身をまかせ、右へ左へと揺られている。動く光をゆうっくりと目で追っている。

普段あまり人の降りないその駅から十分くらい歩いて、なだらかな坂を登りきったところに通のアパートメントはあった。昨夜の暗く淋しくみえていたその情景など存在しなかった様に、早めに学校を終え、下校している低学年と思われる小学生三人が楽しそうに前から歩いて来る。その様子を微笑ましいなあ、というふうに見ていたが、はしゃぐ彼女達の膝小僧に目がいく。グワーンと頭が痛くなり、目の中に、見えるもの全てが飛び込んでくる。目を強く瞑ってみる。ふと目を開けると、純は小学生だったころ通っていたはずの校庭に立っていた。朝礼台には山田校長先生が、月曜の朝に必ずする、為になる話を何か一言話す度に、咳ばらいであったり、え〜〜〜とか、あ〜〜〜とかという音を発しながら話をしている。山田校長先生は頭髪のほとんどが白髪で、ポマードをテカテカに光らしている。色黒で面長ということから、オラウータンに似ている。

「え〜〜それではぁ　みなさんにぃクイズです。ゲホッ　天国の人達とぉ　地獄の人達にぃ　あ〜〜三メートルのスプーンでですねぇ　え〜〜」

目の前の朝礼台の上の山田校長先生、猫背というよりは、やけに背中がまるく盛り上がっている。ヘリウムを吸ったみたいな声が校庭に木霊している。見ると、いつのまにやら朝礼台の前に十三人の小学生達が気を付けして並んでこちらを見ている。日差しがあまりにも強く、純は日射病になってしまうように思った。頭痛がおそう。目の前の子達は、男子は短パン、七人。女子は膝上スカート、六人。純は校長先生の話が終わるのをただひたすら待った。目の前の子達を見ていると、横一列に並ぶ二十六個のぎゅっとひきしめられた膝小僧が表す凹凸が、目鼻のくっきりした人の顔のようで、人体に寄生する人格を持つ一個体の怪物のようで、純は吐き気を催した。校長先生の話、早く終われ　終われ　終われ。

純の目の前にはもとのホノボノ風景があった。下校中の小学生との距離間から、時間が三十秒すら経っていないことがわかった。純はひきつった笑みを浮かべた。

通のアパートに入って行くと、壁はコンクリートで、地下室に入る時のようにひんやりとしている。暗くて、同じくコンクリートの階段を登って行くと、右側一番手前の三〇二号室が、通の部屋だ。アパート全体がカビ臭い廊下の突き当たったところに窓があり、そこから一条に長く伸びた光が眩しくさえあった。通の部屋の前には、猫がきちんとお座りをしている。

「やっぱり、入れてもらえなかったねえ」

純は猫をふわり抱き上げる。その猫は銀色の毛をフサフサさせて真っ青の目で、抱き上げると、茹で上げたばかりの湯葉のように柔らかい。純がその猫を見つけたのは、ゴミ捨て場であった。側にあった鳩の死骸の横でまるでその鳩が母親であったかのように、子猫は口のまわりを真っ赤にして鳴いていた。そのときの鳩の血がプチプチとまるでいちごジャムそっくりだったので、名前はジャムちゃん。いまでは子猫というより中猫だ。

「ジャムちゃん、君の目は本っ当に真っ青だあ」

ジャムを抱き締め純はアパートを出た。

純はもうだいたい通のスケジュールというものを把握していた。それはほとんど決まってといっていいほど、こうであった。昼の一時くらいまでダラダラと寝て、一時四十五分にはふらりと彼いうところの打ち合わせなるものに出て行く。通はもともと花屋でアルバイトをしていたが、二カ月程前に辞めたらしい。いやだいたい花屋で働き始めたのだって別に彼がLOVE&PEACEを主張するヒッピー青年なワケでも、あの花粉のムズムズ感がいいんだよ、とか花に関する動機などは全く無く、それは純の姉の睦が溶けるような笑顔をふりまき毎日のように働いていたからだった。

最近ではどこで見つけて来るのか、スポンサーになれそうな人

がみつかったと言っては毎回違った商売に手を出そうとしている。一儲けってやつだ。この間なんかは世界で最初にインターネットを思いつき、世界中に広めた人がいて、その人に大変気に入られてお金を出してくれるから映画の一本でも撮るなどと言っていた。純はコンピューターのことも、インターネットのことも詳しくはないが、ビルゲイツとかいうMacの人がインターネットのなんたらかんたらである。ということくらいは知っていた。

「ねえ、その人何人？」

通の神経を逆撫でなどしないようゆっくり聞いてみると、真顔で、

「台湾人」

と答えた。放っておくことにした。

純はジャムちゃんをまるで割れ物注意！と赤い字で激しく書かれたシールが貼ってある小箱でも抱えるように抱いていた。下る坂道はやっぱりホノボノで、うすっぺらい風がジャムちゃんの長い長い髭と純の頬の白い産毛をくすぐっていた。

ジャムちゃんが一番好きなキャットフードは、中でも一番安い『猫大喜び』という怪しいものだった。立ち寄ったスーパーでの『猫大喜び』には今日もやっぱり特価と爆弾が爆発したような絵が描かれた札がかけられていて一・五キログラムのものが、百五十円だった。

6

舞のアパートメントに再び帰って来た純は、その白いドアの前で足を止めた。ドアを見つめ今さらながらにもうすでに人の家を自由に出入りしていることを不自然に感じたのだ。（しかも猫まで）結局彼女はどうして良いのか分からず、その背の低いアパートメントの屋上にあるタンクに座ってしばし時間を過ごした。それが彼女なりの"遠慮"だったのだろう。ホケーッとしながらいろいろな思いや考えが頭に浮かんではすぐに、その何かが浮かんでいたことさえ忘れてしまう程に、その夢想の一つ一つは急速で一切の脈絡もなかった。

彼女の頭の声はこんなだった。

『ふんわり　ふわふわ　闇の中　どうでもいい　そうなのだ　ヘラヘラニヘラ　違うだろう　そうじゃないねえ』

『無表情な蚊が落ちてゆく　でっかい蚊　私よりずっと　ずっとでっかい蚊　ぐったりしていて動かない　自分よりずっとでっかい生物に掴まった　そいつの足で掴まれて、そいつははばたいた　上まで行って私のすぐ上をとんでった　だけれどその蚊はそこで足を離され　落ちてった　それでも　ずっと、無表情　そのまま　ヒュルリ　ヒュルリ　ヒュルリと落ちてった』

そんなとき彼女はあまりにも普通に晴れている空を見ていた。

彼女は雨が好きだった。雨が降るたび彼女の心は癒された。それはきっと世の中の浮かれた人々がやっとこの時ばかりは、みんなして下を向いて歩くときだから。雨の上がった次の日だって、ひび割れたアスファルトの上にできた水たまりを見ると、ぶざまにも死んでった父親が路面の汚れた水たまりに顔を突っ伏している姿が浮かぶのだ。そのときやっと彼女の中にある、はっきりしない様々な影が、形を現し、彼女の目の前にはっきりと投影され、彼女は少しばかり安心したりした。

ホケーを続けていたところに舞の黒のオープンSAABがアパートメントに向かって来るのが見えた。車から降りた舞は、すぐに屋上の上の純と、その手の中の中猫に気づいた。純は怒られると瞬時に思い、とっさの言い訳を考えたが、ダメだった。舞はその姿を見て、鼻から息を出し笑い、

「何してんの？」

と聞いた。なんだか犬がくしゃみしたときのようだった。

「ふぇ？」

純は返事にならない返事をした。

「降りて来ないの？」

「降りる」

純の唇の隙間から見えた前歯は唾液に濡れ、舞は彼女のその短いであろう舌の裏に何かが印されているような気がして、降りて来た純の手からそうっと中猫を取り上げた。

「ジャムちゃん」

舞の顔色をうかがいつつ言った。

舞はその日、午前十一時には仕事と言って出掛けたはいいが、本当は、忙しいはずの金曜や土曜でさえ、夕方六時頃に店に入ればちょうど良いくらいなのに、彼は今朝純のいる日の始まりというのに何の違和感さえ感じなかった自分に気づき、戸惑い、アパートメントを出たはいいが、いままで人とは必要以上に関係を持ったことがめったになかったせいなのか、今度は、壮絶な罪悪感に襲われた。純のことが異常なまでに気になって気になって仕方なくなり、こんな時間に帰って来たのだということを、純には言わなかった。

「仕事は終わり？」

ジャムを撫でる舞の横から尋ねる。

「ん～～いや、また戻んなきゃ」

口の中で言うので、よく聞こえなかった。

ピカピカ光る、つるつるの、アメ玉のような紫色のマニキュアを舞の爪に塗っている純。舞は、あいたほうの手で、ジャムちゃんの蚤トリをしている。二人の横には以前からあったエルヴィスのマグカップと、もう一つ、彼が太った後の写真がプリントされているマグカップがあった。

「今度は何色？」

ジャムのフサフサの毛の中を逃げまどう蚤を追いかけながら舞は聞いた。

「白っぽい紫」

細かい作業が必要なプラモデルでも作っているようにせっせと塗る。

舞のところに居着いて、一ヵ月と二週間くらいになるはずだが、純は、このダラダラが好きだった。このダラダラが宝物だと思っていた。彼女にとって舞は、魔方陣なのだ。ピンクのチョークで描かれたこの魔方陣の中にさえいれば、純は、眠れるし、笑えるし、ゴハンも食べられる。もし一歩でも外に出るなんてことがあれば、そこには一切の掴まるところも無いのだ。もっと言っちゃうと、そこには影も無いので光も無く地面すら無いので空も無いのだ。彼は何も聞かない。でも純が話をすると聞いてくれる。これが包容力かぁなあんて思ったりしていた。

純は、すっぽりと飲み込まれたように、暗い森林の中に立つ。ふと、目の前に巨大な男が立っている。

「包容力のある手をしていらっしゃるんですね」

男の両手は木の枝のようになっていて、どんどん細く幾重にも枝分かれしてゆく。男の頭は暗くて黒くて見えないが、紳士の帽子を被っているのは、よく見えた。妙に大きな頭ということもわかった。点くことのないテレビのようにも見えた。

7

今日は駅前の古本屋に行こうと、純はポテポテと自転車のよく通る商店街を抜けて、猫屋敷になっているオモチャ屋の右の細道を入って行った。その奥にある本屋が純は大好きなのだ。小っちゃい小っちゃい店の中は、本でいっぱいで、人一人歩くのが、ギリギリで、お店のおじいちゃんは、本に埋もれてしまって、顔しか見えない。純は、本をみるというよりはそのおじいちゃんがおかしくて仕様がないのだ。純が何を考えるでもなく、ズズーンと重みのある本棚をしかめっ面で睨みつけていると、切れ目の年齢不詳な男が、同じく本棚を睨みつけて立っていた。男は棚の上のほうに手を伸ばし、茶色の布地の本を取り出しパラパラとページをめくった後、そのまま肩から掛けていた白い布地のカバンに本をしのばせ、スッスと男はその場を立ち去ってしまった。純はあからさまに男の方を見ていたが、とっさに自分の方が慌てて本棚の方に首を向けた。男はいなくなり、純はおじいちゃんの顔を捜したが、見当たらなかった。純は思い詰めたような顔を浮かべ、店を出て、男の姿を見つけようとキョロキョロしたところ、商店街とは逆の方へ歩いて行く男の背中が見えた。その男の背中が見えなくなるまで純は、道の真ん中に立ちつくしていた。完全にその背中がなくなり、純はうつむいた。自分の足下を見たまんま、トボトボと男と同じ方向に歩きだした。

男の盗った本は何だったのだろう。おじいちゃんの顔、何故なかったんだろう。

純の右側には線路が真っすぐ伸びていて、まるで夏の線路のように、焦げ茶に錆びたレールが発熱しているように、その周辺がぐにぐにに揺れて見えた。左側にはもう何十年も建っていそうな家がいくつか並んでいた。いつの間にか純は一人、トゲの無いサボテンのように無防備になっていた。だが彼女の左目の端に何かが映り、彼女の心臓は大きく縮みこんだ。ツタに覆われたお屋敷の塀の前に、さっきの切れ目の男がしゃがみこんで茶色の布地の本を読んでいる。本屋では掛けていなかったはずの眼鏡をして、音読しているようだった。本には金字で、『三っつの宝』と書いてある。芥川龍之介とも書いてあった。と、さっきまで気になっていた誰の何という本かという答えが出たところで、自分がまるで腹を出して寝ている子猫のようなことに気づき、本能的にそこにいる男に対し、異常なまでの恐怖心が剥き出しになった。

男がこちらを向く前に行ってしまおう。そう思った瞬間、地をひっくりかえしたような音と、地響きが、純の全身を攻めた。なす術のない無防備な彼女は、声さえも出せないまま、頭を抱えてその場にしゃがみ込んでしまった。この世の終わりか、はたまた自分の気でも違ったか、と思い怖々頭を上げてみると、その地響きの主は、発熱する線路の上を急ぐ特急列車だったのだ。

何でもないと分かっても、よほど怖い思いをしたのか、私ってバカねと、笑えず、そのまま泣きそうなのをこらえようと唇を噛んだところで、突然男が立ち上がったので、純は這うように悲鳴にならない悲鳴を上げワタワタふぎゃふぎゃと、立ち上がり逃げた。まるでテキサスチェーンソーに追い回される金髪女性のように、怖がって、動揺している。

ない　ない　ない　掴まるところ　何処だ何処だ何処だないないないないないない……　アパートメントに帰るが、そこには、舞は、いない。

呼吸が不規則に荒く、恐怖感は消えない。

どんなに捜しても愛しき人の肩はそこにはなく、彼女を襲うものはこの言い知れぬ恐怖ばかり。もう、そこまで来ている憎悪は『許す』、という単純なる言葉を知らず、刻一刻と迫り来るのです。

逃げることだけが彼女の唯一知り得る術なのか。そうだとしても、逃げる正しい術さえも知らず、戦うことなど出来るわけもなく、そうなれば、このまま、なすがまま、我が身を流れの渦に委ね、この恐怖の深い淵へ落ちてしまえば、この吹き止まぬ強風も止まるのか、この開いたまま閉じない瞳も、そろそろ限界かもしれない。

死ぬかもしれない。フト純は思った。いや、別にいいのだけれど、これは本当に死ぬかもしれない。そう感じた純は、夕方家路を行く人波を逆流し、履き古したヒラヒラのスカートのポケットからジャラジャラと小銭を出し、切符を買い、電車に乗って行く宛ては、通の家であった。純にとってのやっとみつけた、たった一つの宝物はたしかに優しく暖かい、それで何故だか懐かしい。

ダラダラの昼前に学校が終わり、お腹を空かせて帰って来ると、カレーライスの匂いが家中に満ち満ちているような毎日だ。愛しき人を裏切る気などことさらない。舞という存在が無ければ、あのままバカを剥き出しにし、狂気に身をまかせ、自らの命を絶っていたか、道行く幼子に電気きつねを見に行こうと、行き連れにしていたやも知れない。ただ純は、自分を、限りなく平坦な現実の世界に引きずり出してくれる、キッカケなる人が必要なんだと考えた。

8

目を閉じて歩くように、何も見ないよう何も聞かないよう、自分の足先だけみつめて足早に歩いた。

不思議だった。何の躊躇も無かった。勢い良くアパートメントの中へ入って行った。

冷たいコンクリートの階段を登ったせいなのか、純の呼吸は荒いまま。通の部屋の戸を開けようと伸ばした手は、わざとらしく震えている。戸は、ギギッとわざとらしい音をたて開いた。

純の出てった日と何一つ変わらない部屋、割れた窓ガラスまでそのままで、へなへなの布団の上で、あぐらをかいている通がいた。雑誌のモデルさんの顔に落書きをしているところだった。通は顔を上げ、純に気づくと、別に驚いた様子などは見せず、顎を上げ、

「じゅん〜〜〜」

ゆっくりと言いながら腰を上げ、まだ戸口に立っている純の側に来た。純がヘヘッといったような苦笑いの一つでも浮かべよう

と、その膨れた頬の筋肉を緩めた瞬間、両肩を鷲掴みされ、体が通の方に引き寄せられたかと思うと、扉の横の薄っぺらい壁に、ドンという音をたてて押し付けられた。急に肩から引っ張られたので、首が痛かった。と、次の瞬間、純の両肩にあったはずの通の手は、純の首をしっかり掴んでいる。いつの間にか部屋の戸も閉まっていた。純の首は細いので通の利き手の左手一本でも充分にゴギッという音一つで簡単にへし折れそうだった。

通は純の顔を見ていたが、右手を彼女の左肩にのせ、左手は純の首をしっかり掴んだまま、うつむいた。

通の左手に力が入り、純の首を二拍子を刻むリズムのように揺さぶり始めた。その度に、何の抵抗もしない純の頭は壁に　ゴン　ゴン　と、ぶつかった。リズムに乗ってうつむいたまま通は言った。

「何　ゴン　で　ゴン　おまえ　ゴン　は　ゴン　そうなんだ　ゴン　ゴン　ゴン　あ?」

ゴン　ゴン　ゴン　通が顔を上げてみると純はされるがまま無表情に通を見ている。その目には冷ややかささえも感じる。

「お前、なめてんのか」

純は静かに首を横に振る。

「何とか言えよ」

純は冷ややかな目をしたまま笑みを浮かべた。もちろんその笑みは通を逆上させた。通がやっと両手を離してくれたので、純が大きく息を一つついたところで、通は勢い良く部屋の中を所狭しと純を振り回し、反対側の壁に叩きつけた。

「ふざけんなよ、な!」

押し殺した声は怒りで震えている。

出したはずの声は声にならず、首を振るばかり。

「気ぃ狂ってるんだよ、お前も。お前の姉ちゃんも。お姉ちゃんみたいになりたいんだろ。もう立派になってるよ。よかったなぁ。後はいろんな男と寝て、妊娠でもすれば、お前の大好きな憧れのお姉ちゃんだよ」

もう首を振ることも、否定することも、呼吸することさえも出来ない。

「じゃまくさいよ、お前達」

純はまた首を振り始め、

「違う」

「違う」

二度呟いたそのとき、純の中でギリギリと張りつめられていた弦が、ビンと弾け、切れた。

絶叫混じりに、

「違うぅぅぅぅ」

と叫んで通に掴みかかりそのまま腰を抜かしたようにしゃがみこんで子供のように泣いている。通は慌ててしゃがみこみ、純の顔を覗き込んだが、純は右斜め上の方に視線をやり、やっぱり大泣きをしながらかすれた声で、

「おねえちゃん~~~」

と泣いている。通が両手で純の頬を覆おうとすると、また絶叫してイヤがり、泣く。

「イヤだあぁぁぁ、通、イヤだあぁぁぁ」

ぐぅうっとかいう音をたてながら両腕を突っ張って通を押しのけようとする。舞のことが頭に浮かぶ、彼もいつかこうやって私に見切りをつける日が来るのだ。いつも私だ。原因は私なんだ。

「今まで人がいろいろとしてやったのにお前は何にも分かんないんだなぁ。バカなんだろうなぁ」

通は純の首をまた左手でおもいきり掴んだ。

「二度と俺の前から消えるなよ」

脅しかかった声色に顔色で必要以上に攻撃的な目をしているはずなのに、何故だかその様子は物欲しげなイゾーテを思わせた。その時純は初めて通から目を外して唇を噛んだ。血が出るくらいにギリリと噛んだ。もうそれ以上顔を見ていられなくなって、目一杯下を向いた。

「何だよ」

そう言われても頑張って下を向いている。

「なぁ」

「私は」

顔を少しずつ上げるが何を言っていいのか分からない。純の脳みそに半透明の柔らかくてそれでいて弾力のある湿った膜が張られた。

「出てけよ。もういいよ」

いきなり純を突き放す。

「お前といるとこっちがおかしくなるんだよ。お前のせいでヘンになるんだよ」

突き放された純は、頭をくしゃくしゃとかきながら扉の方へ向かった。通は純を罵倒したりなかった。全然だった。反応の少ない純の心の動きが分からなく、イラだっている。

「お前おかしいよ、頭おかしいんだよ」

純はその言葉に必要以上に反応した。首を激しく横に振った。

「違う」

私のせいなんだ。

単純である。解決方法その一である。通の唇が、純の唇に近づく、唇が触れるその瞬間、

「何が人がいろいろしてやったなの?」

初めて聞く純の強くて、早い口調。もう泣いていない。

「何でいつもいつもいつもいつもいつもいつも俺があれした俺がこれしたなの?」

声のボリュームは上がる一方。

「お姉ちゃんと私を重ね合わせてたのは誰よ」

通を睨みつけている。どこかで知っている目だ。聞いたことのある声のトーンだ。止めようとする自分がいるのに、止まらない。

「誰がバカなのぉ。誰が何にもわかんないってぇ」

「何で、誰も私を愛してくれないのぉ」

止めろ、止めろ、もう嫌だこんな自分も……こんな自分も……浮かんでこない、他に嫌なものが浮かばないのだ。全てを憎み、全てを嫌っているはずが、この後に及んで自分しか嫌なものがないのだ。そうなんだ、自分自身でしかない、助けてくれ、愛してくれ、私の心はいつも、どこまでも、貪欲なのだ。

純は通の部屋を出ようと扉に向かった。通はそのただごとではない純の様子を見、純の前に立ちはだかった。純が右に行けば、通は左に、純が左に行けば、通は右に、純はそれに対し、癇癪を起こし、

「どけぇぇぇぇ!」

やっと通は自分の行為が純の心をざらりざらりと逆撫でしていることに気づき、その純の叫びを最後に、道を開けた。

ゆるやかな坂道を下る。足早に下る。

「……」
母さんだ、母さんが、私の中にいた。私は母さんになったんだ。
大粒の涙がボロボロと純のスカートを濡らす。
舞のアパートメントに帰る。居ないとわかりつつも部屋をぐるりと見回し、とりあえずジャムを抱き締めた。顔を上げた純はジャムを膝に乗せたまま、電話の子機を手に取り、かつて押し慣れた番号を押す。
「はい、もしもし」
呼び出し音が鳴ったか鳴らないかのうちに、純の母親は電話に出た。その懐かしい怒ったような声を聞くと同時に純は我に返り、慌てて電話を切った。何をしようとしたのだ。自分が母親とは違うという再確認、いやもしくは、その心理は、計り知れないほどに根深く、目に見えない程に単純なのかも知れない。
純の心は吸い上げるように種々多様な情動を駆け巡らせ、もしそれらを、さらけ出すなんてことをしたとしても、自分がどうみられるかとか、そんなことはいたってどうでもよく、かえってその感情が醜ければ醜いほど見せつけることが出来る。最も屈折した素直な自分でいられる相手は、母親なのかもしれない。だが、彼女自身何が起こったのか分からないのだ。少しずつ少しずつ内側から何かに支配されて行っている感じが体を覆うので、まるでこの世界で一人、たった一人生きているようなので、暗黒の宇宙の中のよく分からないゴミやチリやらしか浮いていない空間に、自分という一固体しか存在しないような感覚にとらわれる。例え彼女のすぐ隣りには猫がのんきに寝息をたてていたとしても、その感覚は止まることはなかった。もうダメだ。
まだ、一度として使ったことのない『緊急用Ｏｎｌｙ』と書かれた電話番号のメモは、すぐ手の届く、枕元の棚の上にあった。舞の仕事場だ。
電話をしてみることにしたが、ここで少々ながらの不安が純をよぎる。もし電話をして舞以外の人がでた場合、いたずら電話と思われたり、子供のように聞かれたりして、電話を切られるやもしれない。なんといっても、とても人気のある、高級バーなのだから。純は大人の女性を演じなければならない、と思った。想像したるは、時代違いの羽のついた帽子を被っている由緒あるお金持ちの令嬢。出来るか？　いやいや頑張ろう。
呼び出し音が三度も鳴ったところで、
「はい、バーリトルドアです」
と店の騒音に負けないようにか、声を荒上げた女性がでた。
「あ、あの小倉さん、お願いしますぅ……」
「……」
変だったのだろうか、聞き方がやっぱり変だったのか、もしかして思った通り声が子供っぽすぎたか、
「恐れいりますが……」
「え？　あっぁぁ平岡と申します」
「……平岡さん、少々お待ち下さい」
保留音には、バーリトルドアの予約方法が流れる。『バーリトルドアにお電話有り難うございます。こちらに御来店の際は事前にレストランリトルドアのほうで御予約をしていただいております。電話番号は……』
ここの電話番号にはかけたってムダなんだ。この純が持っている電話番号だって本当はスタッフ用、または常連さんのみが知っている番号で、普通に調べたりして電話帳に載っている番号にかけると直接この保留音と同じものが流れるのだ。そこでレストランリトルドアにかけたとしても、『後程、スタッフが折り返し連絡を入れさせていただきますので、お名前、お電話番号、日時と、人数を残して……』などという留守番電話であった。ウソつきと純は心の中で呟いた。同じことが二度流れ、純は少しばかりイラついた。三度目が流れ始めたとき、舞が出た。
「もしもし」
舞の声は後ろのガヤガヤにかき消され、聞き取るのがやっとのことだ。
「もしもし……純」
こっちの声の方がでかくなってしまいそう。
「うん、どうしたの？」
「舞ちゃん、今いそがしいの？」
「うん、まぁ、今日はちょっと混んでてね」
「……」
「……」
「いや、何でもないんだけど、ちょっと声が聞きたくなっただけ、ごめんなさい、もう寝ます」
「うん、わかった」
すんなり切ろうとする、よけい淋しくなった。ついかすれた声で、
「舞ちゃぁぁん」
名前を呼ぶと、舞には純の切なる声が聞こえたはずが、誰かに呼ばれたのか、
「ごめんちょっとかけ直す」
電話が切れた。もちろんうるさく聞こえていた後ろのガヤガヤもピタリと止まった。
自分の身体を自分に、ぐいと引き寄せた。純の瞳は暗がりの中ギラギラと光る。電話が思ったよりでかい音で鳴った。条件反射で素早く子機を手に取り、弱々しい声で電話にでた。
「もしもし」
「……」
しかしさっきとは打って変わって電話の向こうは異常に静かだ。耳をすましてみても、まるで完璧なる静寂なのだ。悪寒が足先に走る。怖がりながらも、もう一度言ってみる。
「もしもし」
「……あんた今どこにいるの」
母の攻め入る強い声。
「は？」
困惑に重なる困惑。何故、彼女がここの電話番号を。今の今まで私を付け回していた。それとも探偵でも雇ったのだろうか。舞ちゃんに何かしたのだろうか。するのだろうか。
「番号が表示されるやつにしたのよ」
その純の困惑による沈黙に耐え兼ねた母親は、荒々しく種明かしをした。いつの間に、と純は思った。
「通くんの所はどうしたの」
「別に」
「別にって何よ、あんた今何してるの」
「なにも……」
「いいかげんにしなさいよ。あんた今どこにいるの。まさかまた変な男の所じゃないでしょうねぇ。もうこれ以上許さないよ母さんは」

関係ないでしょと言いかけて、慌てて口を噤む。禁句だ。これを言ってしまうときっと彼女は待ってましたと言わんばかりに、純に暴言をまくしたてるだろう。

「もう、いいじゃない、どうでも」

「あんたそれ母さんには関係ないってこと?」

そんなに声を低くせんでも……怖い。

「……」

「今まで苦労して育てて来たのにもう親が必要じゃないとこんなに、ないがしろにされるとは、もう母さん死ぬから」

「ちょっと、もう」

「あんたの父親はねえ、好き勝手するだけして私を苦しめて突然死んで、その上実の娘にこんなに嫌われたんじゃあ生きてても仕様がないしねえ」

この分からず屋の母親に何と言えば良いのか、しかしながら腹が立った。

「恩着せがましいんだよ母さんはいつも、結局自分がどれだけ人にしてやったか、でしょ? あれしてやったからこれしてやったから感謝しろってそれは押し付けっていうんだよ。本当に私があなたに何を求めてたかも知らないでしょう。ねえ、知らないでしょう、え? ねえ、ねええ」

「……あんた、よくそんな恐ろしいことが言えるねえ」

「自分が人にしてあげたことは覚えてても、人にした仕打ちは覚えてないんでしょう。あっそれとも苦労した分チャラですか。じゃあ人生の選択の余地のカケラもない状況で教え込まれた憎しみと恐怖はどうすればいいの?」

「ああ、そうですか。悪いのは母さんだけですか。父さんは好きで母さんは嫌い、どうなったっていいのね。母さん死んでから後悔したって遅いから」

「ほら、そうやってすぐ自分が被害者……」

激しく受話器と電話機のぶつかる音がして電話は切れた。ああ何てことだ、何てことを言ってしまったのか、心が圧迫される背負うほどの重い罪悪感、膝に顔を埋めしばらく揺れてみる、そうしているうちに妙味な孤独感が襲いかかって来た。首根っこを掴まれ、ぶらさげられているような感覚だろうか。静かだ、あんまり静かなので耳が痛い。

彼女は、母親が、純の後ろに立って上から見下ろしているような気がしたが、そんなはずはなかった。ただ、それ程の憎悪が純を襲った。怖い　怖い　怖い　怖い。

様々な感情がある。その複雑な幾重にも重なった螺旋状の無数の魂の中に、一脈の愛しさが潜んでいる。抱き締めてはくれないか、母の胸に顔を埋めたい。自分の醜態も、弱いところも、何もかもを包み込んで欲しい。これらは全て、得るべき時代に得るべきを得ず、あるべき形が造れず、そのあるべき形の流れは、決して止まることなく、変わり続ける。

フィルムの入っていない映写機と、それを必死に動かそうとする映写技師かのように、母親は母であるべき時を逃がし、子は子供でいられる時期を逃し、互いにやり遂げなかった使命なるものを本能的に、未だカラ廻りを続けながら必死にその空間を埋めようと、もがいているのかもしれない。

腐った土の上にはいつくばって涙しながら悪臭放つ湿った土に爪をたて、爪の中は寄生虫とギョウグヂュとした土でもういっぱいなのです。

「……」

純の背中を刺すように、攻撃的な電話の呼び出し音が鳴る。こんどこそ、と思い、電話に出る。

「……はい」

「純んん~~~睡眠薬と頭痛薬どれくらい飲めば死ねるかなぁ」

「頭痛薬じゃ死ぬわけないよ、いくら飲んでもね。全て飲み尽くしてもね。じゃ」

純だって、頭痛薬といえど、大量に飲んで、干からびた目玉のくりぬかれた魚のように長時間放置すれば、おなかが痛いと泣きながら、じいっくりと死ぬことを知らなかったわけではない。ただもう純からすれば、またですか、といったところや、嫌なことはもう全て受け入れません、と、今自分に起こっていることは全て〝ウソ〟なのだ。ウソなのだ。絶対そうだもん、といったところか。

「なんであんたはそんなに冷たいの……冷たいなあ、それがあんたの本性かっ、この悪人がっ」

「もう、わかったから」

「母さん死んでから後悔しても遅いからね」

「しないよ」

「……母さん死んで恨んで死んであんたの人生めちゃくちゃにしてやるから、おぼえてろおぉ」

電話はまたもや切られた。

クラケは時折素敵な笑顔で黄色や青の渦をつくる。だけれど私は赤の渦の中。赤の渦の……それはきっと、あの水晶の指輪のおかげ。

電話が鳴る。電話に出る。

「あんたが、そんなふうに心の病気なのはね、純ちゃんのせいじゃない。母さんが悪いのね、可哀想な純ちゃん」

泣き始めた。好きじゃない、心痛む。悲しませないで、気にしない。踊り狂う。お家が火事にあった彼女は、ニコリと優しく笑い、太ったネズミと共に行くのです。私はもう話ができません。涙は何故だかたくさん出るので、悟られてたまるものかと、音を出さないように息を止める。

「母さんが痛い思いして産んだ子。かわいい子、大好きよ。母さん死んでも自分を責めないでね」

純は電話を切った。

側にあった『セキセイインコの飼い方』という本やらなんやら、とりあえず手の届く範囲の物を投げ散らし始めた。猫は棚の上に避難している。ヒョーヒョー声が出て、

「助けてえええええ」

頭を抱え込んだ。二、三度深呼吸して、呪文のように唱える。大丈夫　大丈夫　大丈夫　大丈夫　大丈夫　大丈夫　大丈夫　大丈夫　大丈夫? 大丈夫なのか? 何か低い唸り声がウゴウゴと部屋の中を這いずりまわっている。手を目の前にかざしてみる。足をそおっとすうっとゆっくりなぞる。

「何これ」

何なのだ。何がぶらさがっているのだ。重いし……邪魔だなあ。だいたいこれは誰のなんだ? 私のものだとしたらもっと軽いはずだ。これは私のなどではない。私の身体はもっとこうガサガサとその辺の物をかき分け、見つけだしたるは、超特大カッター。

何だか少々嬉しくなってきた。左の二の腕の一番白くてやわらかいところに超特大カッターを押しあてた。ピッと弾力のある肌を小さく裂いた音がした。痛い。痛いので、手を止めたが、妙な快感は増幅されるばかり。頭のまわりでいろんな音や、小さな何だかよくわからない物質がヒョンヒョンと音をたて渦をまいている。浮かぶイメージ。死んで行く父親。私は怯えている。私もお前を置いていなくなるからと、私の目を見て言う母親。

行かないで。置いて行かないで。そしてまた怯えてる。みせる涙の無意味さと私の発する言葉の無力さ。いやいやそれでも恨んでなどおりません、一度たりとも誰の事も。こういう時に良い思い出しか浮かばないのは、おもしろい。よく映画に連れてってもらったのはやけに覚えているなあ。ああ優しい言葉の一つでもかけてやりたかった。

「私は悪い人だ」

頭を抱え込み、音を遮ろうと思う。

もの凄い爆音と共に誰かがドアを開いた。その音で大きく体は揺さぶり上がり、よけいにまるみ込んだ。誰かが、純に近付く。

「純……？」

顔を上げられない。完全に塞ぎ込んでいるのだ。肩を掴まれ揺さぶられる。顔を上げるとそこには心配から顔がひきつった舞がいた。もう純の顔には恐怖はみられなかったが、瞳はどことも焦点定まらず、口をもポカリンと開いている。手先だけはしっかりと、舞の手を握り、震えている。舞はその背の高～い木の上の巣から落ちたヒナのような純をみて、自らを痛めつけたくなった。そして途方にくれた。舞は純の小さな体を引き寄せ、力まかせに抱き締めた。純は少々ながらに落ち着いたが、今この時を、一人行き場無く苦しんでいる母親の姿を思い、

「ごめんなさい　ごめんなさい　ごめんなさい　ごめんなさい……」

と、ぼんやり唱え続けた。

お姉ちゃんは、青空色のフィアット500と、でろりと深い赤の夕焼けの中に溶けていった。お姉ちゃんの大好きな青空色のフィアット500でお姉ちゃんは青空になろうとして、西の地中に沈み行く地獄の炎に無惨にも負けて灼熱地獄の鬼達に招きいでられたのだ。

9

二日後の昼間、私達は外に出て、近所をフテフテと歩いた。手などをつないで歩いた。私の履く男物の下駄がゴロガラとうるさく鳴るおかげから、私達は口をきかなかった。暗い竹藪を通り越した所にある幽霊公園でのコンビニランチを済ませ、二人でバラバラの鼻歌なんぞを歌っていたら、えらく白いまつげの長い（二～三センチはある）クルクルに巻かれた白い毛に覆われた昼寝用の枕程の大きさの犬が、私達の前をウロついている。飼い主はいないのかと、辺りを見回してみたが、それらしい人物は誰一人としていない。それどころか、おかしい。いくら平日の昼間だからといって、さっきからこの公園の中には、舞ちゃんと、私と、先にある日陰の中のベンチで泥酔している浮浪者らしきおじさんだけしかいないのだ。

犬は必要以上に可愛く、私達に自己アピールをしていた。私は、なんだきっとここの子は、私達がさっき食べていた弁当が欲しいのだなと、思い、さっきのゴミなどを入れたビニール袋に手を突っ込み、何かないかとさぐうてみたんだけれど、出て来た物は、プラスチックで出来た、あのギザギザの草のような、弁当の具の中身を区分けする緑のあれ、くらいだった。それにしても可愛い。仕様がないので、舞ちゃんと二人で、撫でたりして、かまってやった。犬はしばらく私達にごきげんな様子でかまわれていたが、突然釈然としない顔付きになり、どこかへ行ってしまった。私は、少し淋しくなって、なんだやっぱり食い物目当てだったのだなあと、自分を慰めた。

空を見上げて、隣りの舞ちゃんを見て、舞ちゃんは私が見ていることに気づかないふりをして、前を向いている。人間嫌いの舞ちゃん、だと思う。彼は誰にでも優しく、丁寧だけれど、誰よりも人をそうそう近づけない、閉ざした感じがあった。前に彼のバーが混んでいない日に、仕事場に連れて行ってもらったことがあるが、酔いつぶれた奇麗なモデルさんが、舞ちゃんに抱きついたときハハッと笑いながら彼女を突き放していたのを見たことがある。

「ねえ、人殴ったことってある？」

「……んん～、ないなあ。いつも殴るほどの興味がわかないからねぇ」

「……」

私は一瞬舞ちゃんに殴られたいと、思った。

舞ちゃんはもうそろそろ行くか、と私の手をとった。顔を前に向けたら、さっきの浮浪者らしきおじさんがゆっくり起き上がってこちらに向かって来るのが見えた。同じことに気付いた舞ちゃんは、握っている私の手を優しく強く、握り直した。

おじさんは、度重なる嘔吐と、尿で悪臭を放っていた。おじさんは、首を切られ、頭の頂部を皿状に切り抜かれ、脳みそをズルズルと食われているサルのような目をしている。舞ちゃんの顔を見ながら、おじさんはでかい声をだした。何か叫んだ。だが、何と言ったのか全く聞き取れなかった。そして私の顔をのぞき込み、

「なあんや、月の子か。太陽の子かわからんなあ」

と、言った。そして私達二人に、大きめの声で、

「おっちゃん、ないがしろにしたらあかん、あかんでええ。つまずく石も縁のうちってな。こんな永劫より永劫に続く、時の流れん中にや、おっちゃんも、君も、君もや、今この時に、この幽霊公園におる。これよっぽど深い因縁やでえ。あれや同じ時代に産まれてたってや、一度も顔見んと死に行く人が幾万人おるか。せやからおっちゃんになんか食わして」

死んだサルの目でとっても良い笑顔。私はここの幽霊公園には、腹を空かせたものしかいないのかと、思った。とはいえ先客の可愛い犬にさえ何もあげられなかったものだから、どうしたものかと舞ちゃんの顔を見ると、

「ちょっと待ってて下さい」

と、私の手を引っ張り公園の側のコンビニエンスストアに行き、タラコおにぎりと、ゆかりおにぎりを買って公園に帰ってくると、おじさんはさっきと変わらず、キチンとベンチの前に立って待っていた。舞ちゃんが袋ごと渡すと、おじさんは赤茶色の顔に、幾本もの深い皺をつくり、ゆかりおにぎりをほおばった。紫色のぶてりとした唇を横に伸ばし、奇っ怪な笑顔をつくり、呟き始めた。

「もう、八年間もここでこうしているのだよ。おっちゃんは、鎖も無いし、鉄格子も無いけど、もうずうっとこうしてるんや。こっから動かれへん。これからもずうぅっとや」

おじさんが喋らないと、この公園内は、静かで、何も動かず、私達の頭上高いところを安閑と雲だけが、しかしうぬうぬと地獄の渦んようにうねっていた。おじさんはゆかりおにぎりをゴクリと大きな音をたて、異常に突起した喉仏を上下に動かし飲み込むと、二口目をほおばった。

「おっちゃんなあ、若いもんがたれが好きや何や言うて、恋愛神聖を叫んで、蠢動してんのは、片腹痛い、ちゃんちゃらおかしい、ヘソが茶あ沸かすわ、思てんねん。本気や熱烈や言うて、固い誓い交わしたぁ言うても、たいがいは相対的。顔がいいやら、技量が優秀やら、それもこれも条件、みいんな、条件あってのことや。そんなもんはなあ、右手　左手　右足　左足の　太っい動脈が情欲っていうでっかい手でピンッて引っ張られて、プラプラカクカクカタカタカタカタカタカタカタカタカタ操られてるだけやねんどお。結局は自己満足や。あほか。天地消滅。善も悪も美も醜も利害得失も年齢も道徳もない真実の恋愛を味わい得る人が、さああ幾人おるもんかなあ。動脈はいつか擦り減って、ブチ切れるぞおおお」

呼吸する間もなく降りしきる夕立のごとく話していたおじさんは、やっと大きく息吸い両肩が脱臼したように、両腕をダラリとたらし、私達の足下にグゴエッと嘔吐した。

10

アパートメントに帰ると、留守番電話の光が点滅していた。聞くと、純の母親の勤め先のものと言う人からで、母親が頭痛薬を一瓶飲み干し、一週間ほど入院するとのことであった。メッセージを聞いた後、純が一人ホケーッと座っていると、舞は純の隣りに座り、純の頭を二度軽く叩いた。

黙ったまま、純の隣りに座ってくれている舞を純は感じた。あ　私達はここに存在するのだ 同じ列車に乗り、同じ揺れを感じ、ゆうらり　ゆらり　ゆられているのだ、と幸せの沈黙とは、崇高なものだ、と純は感じた。純は何だか嬉しくなり、舞が愛おしくなり、でんでん太鼓の一振りのように首を舞に向け、古典少女漫画のような、満遍のない笑顔をしてみせた。薄暗い部屋の中、ほわりと映し出されている舞の顔。舞の顔はよくよく見てみると、暗い瞳をしていた。気の弱そうな中に、ギラギラと奇を衒った鋭さがあり、燃えたぎるキリンを見ているように時折悲しげで、それでいつだって、優しさでいっぱいだった。それが、先天的なものなのか、後天的に身についたものなのかは、皆目解らないが、その内には、孤独に似た淋しさのようなものがどよどよと、蠢いていた。

舞は眠くてしょうがない時の子猫の様に、体中の力を抜き、体育座りをしている純の腰に両手をまわし、ぽてりと脂肪ののった柔らかい下腹部に顔を埋めた。純はそれに答えるように、彼の獣のように柔らかい髪に指を絡め、頭を撫でた。彼はくつろぎ、静かに、低音で話し始めた。その声はなんとも心地の良いバイブレイションとなり空気にのって、純の耳に届いた。

「仕事のせいなのかね。みいんな打算的でねえ……なんか、みんなよく笑うんだ声高らかに、がむしゃらに、共に笑っている人が誰とわからなくても……」

舞が、大きく息を吐いたので、純の下腹部はじんわりと熱くなった。

「何がそんなに楽しいのか、楽しいのが何なのか解らないから笑うのかって、そんなふうに周りの人間にイラついてると、実は自分が一番どうでもいい無意味な人間のような、行き着く所もなく、ずうぅっと、薄暗いバーの中に座って歳老いていくような気がするんだ。それでそれでそのまま……終わり」

舞はハハッと小さく笑った。

「たまに誰か俺の側に来て、どうしたのって薄ら笑顔浮かべて聞かれても、その周りでその晩つがいになる相手を懸命に捜されても、そいつらがいくら苦しんでいても、できるだけ上質の白い粉を出来るだけ多く買うことを年中考えてても、どうでもよくて……何かねえみんな必死なんだよ。んで、そうこうしていると、めまいがしてきて、周りの人達が、竹庵とか、お美代とか、ただ名前をつけられた、魂の無いマネキンにしか見えなくなって、世の中がザワザワ、ガーガーとラジオの局が合っていないような、テレビの砂嵐とか、雑音という雑音が混ざりあって、そのマネキン達は、カラクリ人形みたいに、超音速の速さでグルグルグルグル回り続けるんだ」

純は舞の髪を撫でるのを止め、彼の顔のパーツパーツ一つ一つを盲目の子供のようになぞり始めた。

「舞ちゃんは、カラクリ人形になれないから、カラッポなものはいらないから、淋しいんだねえ」

純は、舞の鼻をなぞるところでピタリと手を止め、すねた子供のように下唇を突き出し、

「私もカラクリ人形かも……いつも必死で、グルグルグルグルグルグル回ってるかも……」

顔をうずめた舞の頬が動き、微笑んでいるのが分かった。

「違うんだよ、純は。君はもの凄く流れのきつい川の真ん中に立って、自分の身が、流されてしまわないように必死に頑張って。川の流れが気持ちの良いせせらぎになることを願い、未だ身動きのとり方を知らないんだよ」

舞はその時、純と自分をつなぐ決定的なものが何なのか、純の短い舌の裏に書いてあるような気がして、純の唇にソロリと触れてみた。

それから一週間、純は母親の見舞いに行くことは無かった。それどころか、純は何だか毎日うるさいくらいに元気だった。疲れはて仕事から帰って来た、嫌がる舞に飛びつき、舞の両手を持って、踊る。純は、舞の気難しそうにしている顔を見るのが嫌いではなかった。彼は、純の、その不安定な言動がどこから来るものなのか理解していた。

この一週間、毎日純の母親は病院の公衆電話を使って、電話をかけてきていた。毎日純自身の中で、そんな出来事は存在しないものと、言い聞かせ、毎日、多大なる罪悪感にさいなまれ、自らを責め、それをまた否定する連続なのだろう。

純は、とにかくよく笑った。気違いさながらに笑い、叫び、黙りこくった。何より彼女が暴れた際、押さえ付ける舞に暴力をふ

るった。純のおはこは、噛みつくこと、であった。
　母の退院日の今日、例のごとく純は虚ろな眼で、大量の十円玉を数えたり、積み上げたり、きちんと並べたりしていた。その横で舞は寝転び、『火星の近代化』という本を読み耽りつつ、足で純のでっかいおしりをこずいていた。そのときスペインの海老のように濁った赤色の電話が鳴った。二人とも、でる気配は無い。留守番電話が答える。
ピー「……純？　母さんですよお」
　茶目っ気たっぷりである。
「母さん今日退院するんだけど、母さん、純ちゃんに会いたいなあ。病院の中庭で、ねえ、誰かあ、いませんかぁ。聞いてますかあ、アハハ、純ちゃぁん。あのお……三時に、待ってます。来てねえ」
　不自然に機嫌の良い声は、電話の切れた後もしっかりと耳に残った。純の虚ろな眼に変わりはないが、十円玉遊びの手は止まっていた。舞は顔を上げ、純の様子を見つつ、何らかの決着でもつけたかったのだろうか、純と母親の奇異恋愛のような関係に、もしかしてみると、純は、終止符を打つがために彼女は母親に会いに行きたいのではないか、舞は全力でさりげなさを、よそおい、聞いてみることにした。
「連れてってあげようか」
　純は車の後部座席に座り、やはり焦点定まらぬぼやけた瞳のまま、顔や腕に比べると、異常に白い足を、運転席のほうまで投げ出している。舞は無言で運転しながらも、自分はきっと、この少女にただ何かしてやりたかっただけなのかもしれない。そんな動機から病院に車を走らせているような気がしてきたものだから、何だかやるせない気持ちでいた。迷路のように真っすぐでない細い路を幾度も曲がりに曲がって、舞は、今日という日はなんて緑の目立つ日だろう、と思っていた。
　行きついたその病院は、白く高い塀と、白い建物、なにもかもが白と、緑と、ガラスの放つ乱反射で目が痛かった。舞は病院の入口で純を降ろし、車を停めに行った。
　病院の中庭に立った純は今静かな興奮に駆り立てられていた。白い建造物を背に、母親は、小さい黒のボストンバッグを胸に抱き立っていた。純は自分の中で騒いでいる興奮に気づくこともなく、はたから見ればそれは何の感情も読み取ることの出来ない能面のような表情で母親に近づいた。
「子供は何も解ってないわ……」
　純がもう母親の斜め前にいたのに、真っすぐ前をみつめ、母親はぼんやりとつぶやいた。
「……」
「……」
「今まで育ててもらったことに感謝の一つも無い」
「……」
「……」
　母親はやっと純の方を見たが、何も言わないのに対し、純は今まで母に向けたことのないほどの強い目でしっかりと、見つめ返していた。それはどんな暴力や暴言の反抗にも勝る真の無言の反抗であった。しかし純は口を開き、
「何？」
　と、母の目をみて言った。母親は、また真っすぐ前に目をやり、ため息をつき、
「私が本当に死んでたら、あんたは後悔でもしたんだろうけど……」
　いやになる。いやになった。また急激に嫌気の波が純を襲ってきた。
「もういい？　ねえ、もういいでしょ。ああ、もういいわ私、じゃあまた、いつか」
　そう言って大袈裟な手振りをし、綺麗なターンを描こうとしたところ、
「じゃあ、行こうか」
　と、母は純に言ってのけた。純はさっきまでの、いや一週間前からの母の態度の豹変ぶりと、その早さに感心のカケラさえもいだいた。だがやはり聞き間違えでは無かろうか、と。
「は、どこに？」
　眉を歪め、聞いた。すると、母親は、胸に抱いたボストンバッグを赤子をおぶり直す時のように、ぴょん、と膝をバネに、抱き直しながら、爽快ぶった顔をして、
「帰るんでしょ。一緒に、母さんと」
　ニコッ。
「いや……わたしは行けない、あなたとは」
　母の爽快ぶった表情は、石膏の面でも割れるかのように、簡単に消えうせ、その下には、あばかれた怒りの表情が静かに現れた。
「男か……」
　低く喉の奥につまる声で純を睨みつけた。純はどう答えるべきか考えた。無言の否定　男　憎悪　支配欲　どろどろ　どろどろ
どろどろ　我が子は自分の物でなければ……どろどろ　どろどろ
許してはいけない。守らなければいけない。どろどろ　どろどろ
どろどろどろどろどろどろ　不純だ。
「ここに一緒に来た人？　その人がどうしたの」
　あまりにもわざとらしいかもしれないが、そんな言葉くらいしか無難なものが、浮かばなかったのだ。母親は昔から、男のこととなると、血相をかえていた。はたからみれば、古風な考えの女性であったのかもしれないが、少々それとは違っているようである。母親も知っている通の場合、彼自身、母親に気に入られようと、純や睦よりも、その親に、えらく熱を入れていたものだから、彼は特別視され、おこずかいさえもらっているような妙な関係が出来上がっていたものだ。きっとそれは母親のスパイ買収のようなものだったのだろう。母親はお得意の脅しの目付きで、
「その人と何か変なことでもしてたら許しませんよ」
　変なこととは何のことか、純の知ったことではなかった。
「まあ、じゃあいいわ。しょうがない、その人も一緒に行きましょ」

11

　ハスキーボイスの男の歌と単調なピアノの音が流れる車内、舞は何も言わずハンドルを握っている。私は後部座席で腰をシートに滑らせすわっている。助手席には、上機嫌のニコニコ顔の母親がいる。母さんは生娘のようにはしゃいで病院での生活の話を一人早口にしている。
「あそこの看護婦さんダメよ。あれじゃあ、太ってるし……」

「人の世話する前に自分の管理しないと……あっ純ちゃんご飯はもう食べた？」

「うん」

私は彼女の方を見ることもしないで、答えると、彼女は大声で「え？」と、耳の遠いおばあちゃんでもしないほどの聞こえにくそうな顔をつくって言った。私はこの落ち着かない状況に、じとり、と汗ばんだ手をぎゅい、と伸ばし、母の大袈裟な身振りや口ぶりに無性に腹をたてた。私は、彼女のわざとらしいはしゃぎっぷりも大声も、どうしたって好きになれなかった。私は意識しないままに、もっと大きな声で、

「うん、食べた」

と怒鳴っていた。母はそれに対し、

「何よう、その言い方」

とかわいらしく怒ってみせた。母さんは舞ちゃんのほうに向き直りニコリ、

「あなた、お幾つ？」

「あ、三十二です」

舞ちゃんはバーの仕事で身につけた笑顔で彼女にも優しく笑うのだなあ。

「あらっ、じゃあ、私と一緒じゃないホホホホホホホホホホホホホホ」

車内の曲をかき消すほどに高らかに笑う。はは……。私達は押し黙り、車内にハスキーボイスとピアノの音がもどった。するとまた母は、

「お仕事は？」

「バーのフロアマネージャーをやってます……はぁ」

「あら、かっこいいじゃない。じゃあ、今度おごってもらおうかしらん」

ぱしり、と舞ちゃんの膝を叩いた。母さんは、馴れ馴れしく舞ちゃんに触れたのだ。なんだか私は彼に悪いことをしたような気がした。

「いいよお、母さんは行かなくて」

私は声をまたまた荒上げてしまった。

少々はずれているとはいえ、都心周辺に建ってある家にしては大きめの住み慣れたはずの家に帰ってきた。生まれ育ったその家は、もう、何十年と一人ぼっちで建っていたからっぽのホンテッドハウスのように私の目の前に、誰を迎え入れる様子なく、こちらを横目でみていた。母は舞ちゃんに小さな子供に言うように、「ありがとう」と礼を言い、車のドアを開け、左足を外に出して私のほうを横目で見て、ニコリと何らかの合図をしたので私はそれに答えるように「じゃあ母さんまたね」とニコリと笑いかえすと、彼女は車から完全に出て、目を見開き窓ごしに私を見下ろし、

「よっていくでしょ」

彼女の見開いた目を見た私は、なおさら帰りたくなった。

「いや、もう行かなきゃ」

私が言ったと同時に彼女は車の後部座席のほうのドアにガリッという爪で引っ掻いたような音をたて両手で掴みかかりドアを開けようとしたが、ロックがかかっていたため、彼女は「出なさい」と、ど低い声で、叫んだ。私は母の様子が、おかしくなる、という被害を、これ以上大きくしないためにも、慌てて車から出た。

「あんた何考えてるの。母さん今日退院したのよ」

彼女の声は、私の耳、舞ちゃんの神経、黒い車、そして、私達を無視するように建っている家をキュイキュイと刺激した。怒鳴り声は嫌いなので、私は、

「母さん、声大きい」

と静かに言った。すると母は、横目に私を睨みながら、

「いいかげんにしなさいよ」

と今度は少々抑えた声で言った。だけれどまだまだ気が済まないらしく、彼女は続けた。

「だいたい一度も見舞いに来ないって、どういうこと？　私が今まで血を吐く思いで必死で働いてきたのもぜえええんぶあんた達のためだったのに、もう親がいらなくなったら無視か」

母の一度抑えた声がまたどんどんと大きくなってきたところで、舞ちゃんが音をたてないように車から出てきた。母は怒鳴りながらもそれに気づいたらしく一息おいてまたまた、小さな子供に言うように、

「車ここに、停めてて大丈夫だから、ちょっと飲み物でも買って来てもらえないかなあ」

と、ニコリ。

「何がいいですかねえ」

くしゃくしゃの頭をさらにくしゃくしゃとかきながら舞ちゃんは背をまるめた。

「うん、何か適当でいいからあ、この路ずぅぅ～っと真っすぐ行くと、ちっちゃな信号があるから、そこを左にまがったところに店がありますから」

さっさと行けという感じは、あまりにもあからさまであった。

舞ちゃんは弱ったようなふてくされたような表情をうかべながら頷き、私のほうに向き直り、その表情の印象を変えないまま微妙に笑顔を浮かべ、私に近づいて来た。その後ろで母はもの凄い形相をして私を見ている。私はいったい舞ちゃんが何をするのか解らず、舞ちゃんに、何？　というジェスチャーを、顔でやってみせたが舞ちゃんの表情は依然変わらず、私の肩に手を伸ばし、ふわりと優しく私を抱きしめ、私の耳元で「大丈夫？」と聞いた。私は、目の前にある母の顔を見つめながら小さく頷いたところ、舞ちゃんは体を、絆創膏をはがすかのように私から離して、そのまま母の横を素通りして行った。私はなんだか母に対して、ククククッと含み笑いの一つでもしてみせたくて仕様がなかった。こうなると、もうどうでもよくなってくるのだ。怖くないのだ。愛しき人を失う恐怖に勝るものなどないからなのだ。沼に浮く草や、山林の青葉が包まれるかのように、孤独なもの同士の持つ、鋭利なトゲが、心地良く、慰めのようでもある。幾年となく求愛の手を待ち続けたその長い長い時は、堅く閉ざされていた内に秘めたる空間は、無条件で全てを許し、無条件で全てを受け入れる。轟々と泣き止まぬ我が子が、今静かに腕の中で眠りにつくように、何もかもを包み込む母性のような愛に満ち満ちていて、さしのべられたその手に、一度つないだ求愛の手に、ただただ、すがりつくしかないのだ。

だが私は遅かれながらに母の心情を察し、笑うようなことなどはしなかった。舞ちゃんの姿は、もう見えなくなっていた。母は、それを確認したらしく、私の方を見つめた。

「だいたい、何であんたはあんな夜の仕事してるような、浮わついたやつと一緒にいるの。今のも何だと思っているの。人のこと

なめてるわ、あんたもあんな奴にあやつられたりして、許さないよ。今すぐに母さんの所に戻って来なさい。」
　自分のことならよかったのだろうけれど、舞ちゃんのことを言われ、頭の中がささくれのような物でいっぱいになった。私は、甘やかされた子供がすねた時のように上目使いで母を見た。
「それは……出来ない」
「あんた、そうやってねえ、睦も母さんの言うこと、聞か……」
「もういいよ、姉さんの話は」
　今度は私の方が怒鳴っていたようにも思う。
「あなた達みんなして母さんをバカにしてるのかあぁっ」
　きっと母の顔も私の顔もぐしゃぐしゃに崩れていたのだろう。私達は一瞬見つめ合ったまま何も言わなかった。見ていた母の顔は突如として気弱にも泣き出しそうな顔になり、ブツブツと、
「私の純ちゃん　私の純ちゃん　私の大事な……」
　ジリジリと私ににじりよって来ている。私はだんだん自分の意識がどこで何がどうなっているのか、分からなくなって来ていた。気がつくと母は私の目の前に立っていて、両手で私の頬を覆い、
「今までごめんね、辛かったでしょう」
　母の目はその時ばかりは、木々生い茂る緑の濃い真冬の山のごとく冷たく落ち着き、私を包み込んだ。その時、私の中で、常に壮観と存在していた巨大な氷が、急速に溶け始めたのを感じた。それとは真逆に、そんな一言で救われてなるものか、いやしかし、何故こんなにもどうでも良いのでしょ。理性だとかましてや自制だとかいうものがごそごそと消えて行き、意識が遠くなって行くのがわかった。
　気がつくと、目の前には、ほうぼうと赤色の地面が広がっていた。するとその地面から、モゴモゴと奇妙な人が生えてきて、ペコリと私におじぎをした。奇妙な人が言うのです。
「あなた……。……。……。人間止めますか？」
　私が何か言おうとして口を開いたところで、奇妙な人は、続けるのです。
「そこにいた五位鷺に、あなた鳥やめますか、と問う」
　私達はしばし見つめ合ったところで、奇妙な人はまだまだ続けるのです。
「そこにいたリスに、あなたリスやめますか、と問う」
「……」
「……」
「五位鷺は答えます。私は、五位鷺として生まれたので、日々この悪臭放つドブ川の水面に映る我が姿を見ながら、五位鷺として死にましょう。リスは答えます。リスの毎日はシッポ、フリフリ小鳥と遊んでおります。いつ捕らえられ飢えの糧とされるやわからずとも、長くはないリスの命、リスとして生きて行きましょう」
　ほうぼうに赤い地面が粘着力のある、深い赤となり、私の足の裏に吸い付いてきたところで、私の唇がぬるりと暖かくなった。
　頭の中に声が響く「お前は生かされていただけ。」
　目をしっかりと開けて見ると、母のどす赤い口紅の塗られた唇が私の唇をぬめりと暖めていた。きんきんに冷えた炭酸ジュースを脳内に注いだような鼻の奥を突く感覚と共に、今度は腹部にじわりと熱がこみ上がってきた。その熱は急速に私の中から湧きいでる。自分の腹を見てみると、そこにはでっかいハンティングナイフがいきり刺さっているではないか。顔を上げると、愛しき母の肩ごしの遠方に、舞ちゃんの姿が見えて、その時、胸が一つトスンと鳴り、心落ち着きました。

12

　ズリズリと崩れ落ちる純に気づき、舞は駆け寄った。母親はその舞に気がつくと、必死に純のぱかりと切れた腹にきつくしがみついた。舞が近づくたびにその腕はぎゅいぎゅいと純の腹を締め付けた。
「お前か！　純ちゃんと私を引き離すのは！　もう一緒にくらすんだから、この子が私を幸せにするんだからあああ。向こう行け！　人さらい！　警察呼ぶぞ！……」
　罵声に、罵声をあびせかけ続け、ヒステリックに純を離そうとしない。純は母親の腕の中、苦しそうではあるが、あまりにも力無く、舞と母親の顔を見ていた。舞はスタスタと母親に近づき、拳で彼女の左頬を力いっぱい、上から下に殴りつけた。ひゃあという少女のような声を上げ、路上に顎を叩きつけられ、ぶざまに転がった。舞は力無い純を抱き上げ、歩き始めた。後ろ手に母親の声は響く。
「何故私を置いて行く。なあぜ、私を置いて行くぅ人さらい、人殺しぃ……」
　車に乗り込んだ舞は、意識のあるかないか分からないほどの純の頭を自分の膝の上にのせ、得意の弱った顔をして、
「もう一発ぐらい殴っとけばよかったかなあ。なあ純」
　舞は目を閉じる純の唇にそっと触れる。短い舌の裏を見てみた。純と自分をつなぐ決定的なもの。そこには、『もういっかい』と描いてあった。舞が純の顔をみてみると、純はニヤリと笑っていた。純は薄目を開けて、
「何度でも会いたいなあ」
ともう一度笑った。

一九九九年一〇月二九日　文子

平成12年11月25日発行

定価：1,050円（本体価格1,000円）

監修：庵野秀明
原作：藤谷文子 ©2000 Ayako Fujitani
スチール撮影：長田勇市
（表紙、P.1〜3.20〜21.40〜41.59〜61.63〜65.67〜72）
編集：徳木吉春
編集担当：筒井亮子（スタジオジブリ出版部）
デザイン：グルーヴィジョンズ
発行人：鈴木敏夫
発行：スタジオカジノ（株式会社徳間書店 スタジオジブリ事業本部）
〒184-0002 東京都小金井市梶野町1-4-25
電話 0422-60-5630
©2000 STUDIO KAJINO

印刷・製本：図書印刷株式会社

「式日」©2000 F&A・STUDIO KAJINO

原作となっています『逃避夢』は、
反対側からです。

はじめに

このお話は、私が十七歳の時に書きはじめたもので、そこからは、誰にせか
されるでもなく、しかし、自らの背を押す様に、書き進めたり、止めたりをくり
返しながら、十九の末の頃、やっとこさ完結したものです。
私は、学校という場においては常に、こよなく『国語』という教科を
好きでおりましたが、それと逆に、私はいわゆる『キチンとした文法』や『正しい
文章とは？』なるものには何故だか興味がわきませんでした。
中学受験の時の国語のテストで出題された一問で、私の答えが間違
っていた。時の解答に未だ
納得していないからか？しかしながら私は、人間の心や頭から発せられる『言葉』
が好きです。そのヒビキも好きで、『夢想』や『空想』、中でも『現実』というものは、恐ろしい
程に興味深く、感嘆の声をあげたくなる程でありながら、常に私の側に
あります。ついでに、『妄想』なども大好きです。あの頃の私は、それらのもので構
築された世界の中に住んでいた。そして、何をするでなく、何をしても、そこから抜け
出せないでいた。どこかで何度も聞いたコトのある言葉を思い出した。何事も、
結果が出ればよい。結局、何と言われようが、一番になりさえすればよいのだ
という。そんな言葉を思い出したら、嫌な気持ちにみまわれた。結果を
だすことの出来ない、一番になれない自分は、どうすればいいのか。困惑
して、苦しまぎれに私は、自分の頭上に張りめぐらされた言葉達を、書き記し続ける
ことにした。ちゃんと、完結しないでなるものかと、思っていたのだろう。そうして
出来た、このお話、よく言われる結果なのかというと、少し違う気がするが、
これから、『逃避夢』を読み進んで下さる方、読み苦しい点、変な文章
などと思われる点が、多々出てくるやもしれませんが、私は、あの十七、十八、十九歳
の、文子という女の子の、想いや考え、計算や、打算といった全てを、
少しでもくみとるべく、まことに勝手ながら、彼女の言葉を、
一語、一句変えることなく、こうして本にさせていただきたいと、思います。
そして、それを寛大にも、読んで下さる方。すみません。
ありがとうございます。

藤谷 文子